# 漢鏡の圖柄二、三について

林　巳奈夫

一、序　一頁
二、方格規矩四神鏡　二頁
(1) 方格規矩の圖式　二頁
(2) 四　神　圖　一四頁
三、三段式神仙鏡　二四頁
(1) 華蓋、天皇大帝　二四頁
(2) 蒼頡、神農　三一頁
(3) 若干のヴァリエイション　三七頁
四、重列神獸鏡　三八頁
(1) 西王母、東王公、蒼頡、神農　三八頁
(2) 伯牙、鍾子期　四〇頁
(3) 黃帝、句芒　四三頁
(4) 天皇大帝、南極老人　四六頁
(5) 五　帝　四八頁
(6) 常儀、羲和、蠡形水神　五〇頁
五　結　び　五六頁

## 一　序

漢時代、鏡は死者の副葬品として極めて普通なものであつた。洛陽燒溝漢墓では一墓に最低で一面、九五基から青銅鏡と鐵鏡を合せて一二七面が出たと報告される。[1] 資料の數がおびただしいのももつともである。漢鏡は古くより骨董品として蒐集され、その研究の歷史も新しいものではない。考古學的研究の對象としても、その型式分類、編年の分野の研究も進み、それに關する知識は或程度まで中國美術、考古學研究者の常識化してゐるといふこともできる。然しながら、各型式の鏡の圖柄が何を表はし、どのやうな象徵的な意味をもつたか、といふことになると、まだまだわからないことだらけ、といふのが實情と思はれる。中國鏡の研究には專門の方方もゐられることであるが、紋樣のことであれば貢獻することができる部面もあらうと考

へ、淺學を顧みずにこの分野の問題をとり上げた次第である。漢鏡の圖柄といつても實に多様であるが、ここには漢人の世界像と關聯の深いもの若干について考へてみたい。

## 二　方格規矩四神鏡

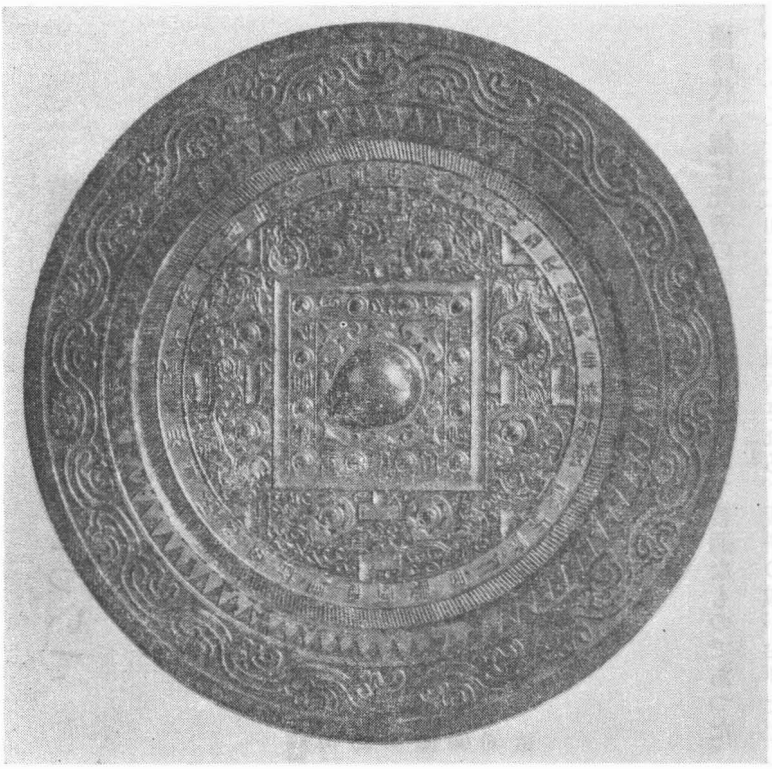

圖1　方格規矩四神鏡　約1/2　京都國立博物館藏

圓の中に正方形を入れ、T、L、V字形を組合せた圖形、所謂方格規矩を要素としてもつ鏡のうち、最も普通なのは前漢末から後漢に多く作られた方格規矩四神鏡である（圖1）。いくらでもお目にかかるものであるが、その圖柄の基本的な割付に使はれる所謂方格規矩が何を表はしてゐるのか、四神はわかるとして、それに伴ふ四神以外の動物は何なのか、確信をもつて答へられる者はないのではなからうか。まづ所謂方格規矩の方から解明してゆかう。

### (1)　方格規矩の圖式

よく引かれる所であるが、中山平次郎は古く[2]T、L、Vの形の原形を前漢の中・後期の草紋鏡、葉紋鏡の紋様の一部に求め、それが變形された結果出來上つたも

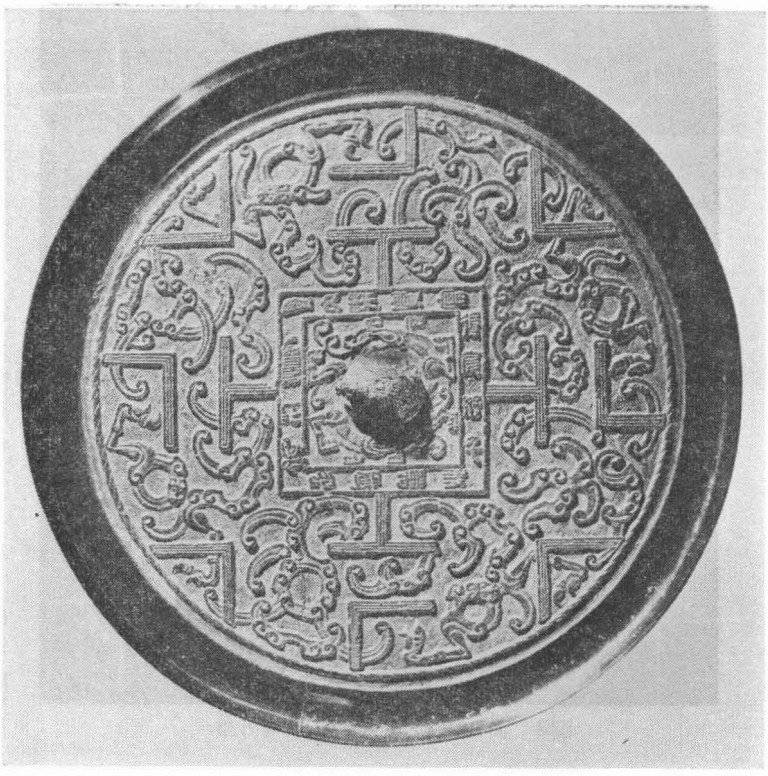

圖2　方格規矩蟠螭紋鏡　約1/2　東京國立博物館藏

のとみて詳細な考察を行つてゐる。のちに後藤守一もこの説を引用して賛成してゐる。[3] この中山説は圖柄の變遷の型式學的研究であり、それなりに説得力をもつたのであらうが、現在では從ひ難い。鈴木博司も注意するごとく、[4] 方格とT、L、Vを組合せた圖式は戰國後期式（前漢前半も含む）の鏡に早くも完全な形で現れてをり（圖2）、中山氏の引證した葉紋鏡よりも一段と古い時代から存在したことが知られるからである。この圓、方、とT、L、V字形を組合せた圖形は、さうすると中山の考へたやうに或る型式の紋様をもつた鏡から變化した結果生れたものでなく、この圖式が鏡とは獨立に存在し、それが鏡にもとり入れられ、戰國から漢にかけて、時代の推移と共に龍とか葉紋、草紋、四神圖など、異なつた紋様と組合せられたものと見なければならない。

イェッツは[5]方格規矩鏡にあるのと同じT、L、Vの圖柄が陶齋舊藏、及びホワイト所藏の漢代のものと思はれる石製日時計の目盛板（圖3、4）に刻まれてゐることより、所謂方格規矩鏡を「日時計鏡」と命名してゐる。そして日の影によつて時刻をみるための方射狀の線以外に加へられてゐるT、L、Vの圖案については劉復の次のやうな説明[6]を採用してゐる。劉復説の概略はかうである

この日時計の目盛板は圓周を百等分し、一目盛が一刻に當る。一―六十九まで數字を記入し、自餘は夜で日が射さない時間だからブランクにしてある。この日時計は勿論中央に棒（表）を立てるのであるが、目盛が等分になつてゐるから設置する時は面を赤道面と平行に、「表」が北極に向ふやうにするわけである。さうすると、秋分以後春分まで、日光は日時計の面より下から射すことになり、「表」の影は日時計の目盛にはうつらないことになる。その缺點は、目盛の線の外端にある孔に補助の「表」（「遊表」）をたててみて（圖5、H′E）、それに中央の「表」（同圖、PA）の影が重なるかどうかをみて時刻の目盛を讀むことができる。ところで圖4、bに示されたやうに、目盛板にxx、yyの線があるが、xxの線の中心からの距離（圖5、Ax）及びyyの線の圓周からの距離（同圖、Ey）は、計算してみると圖5に示した「遊表」上のH′Y及びHYに大體等しい。「遊表」上の點H′及びYとは、夫々冬至及び夏至に「表」の頂點Pが「遊表」上に影を落す點で、ここに印をしておけば、この日時計でもつて大體冬至、夏至を知ることができるわけである。「遊表」に印をしておけば足りるのに、何故日時計の目盛の面に線で印をつけたかについては、劉復は「遊表」は折つたり失つたりし易いから、ここに目印をしたのだらうといひ、またそれなら一ヶ所で足りるのに四方に刻してあるのは、その方が體裁がよいからだ、と。

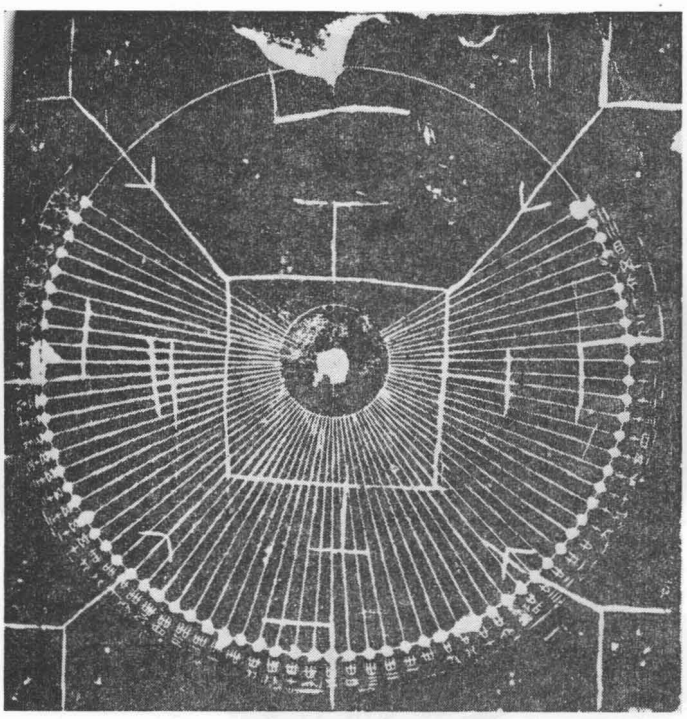

圖3　漢日時計　傳歸化出土　約1/3

カンマンが指摘するやうに[7]端方舊藏品（圖3）の日時計の方に

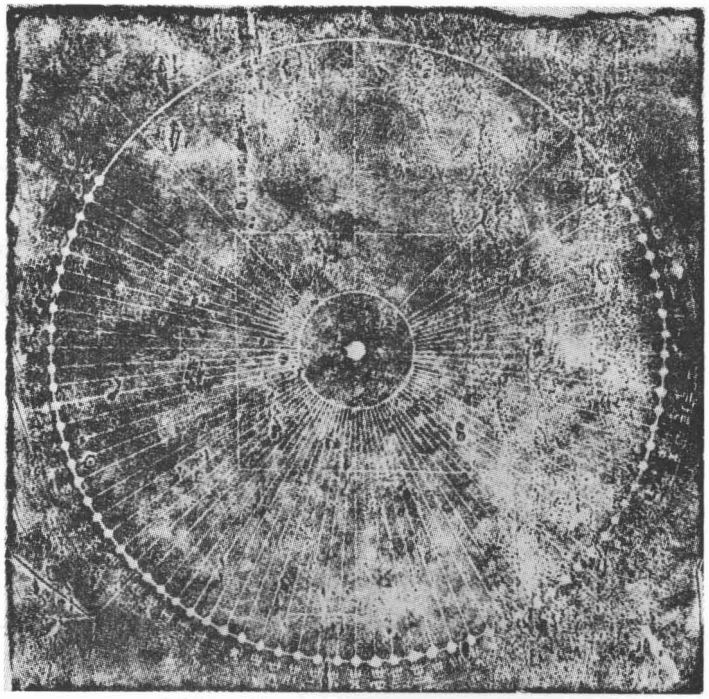

圖4a　漢日時計　傳洛陽出土　約1/3

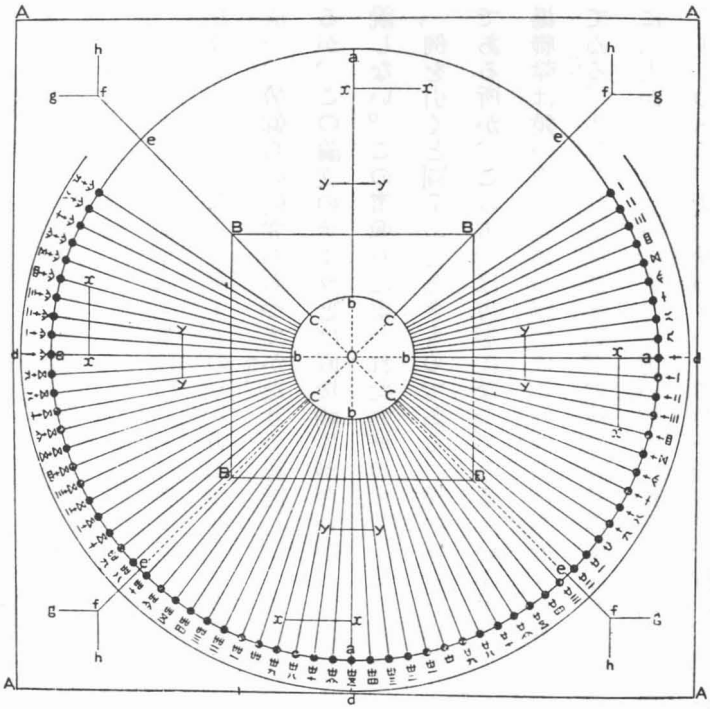

図4b　同　上　模　圖

は、出來上つてから後、明かに別手で方格規矩が彫り加へられてゐる所からみて、これが日時計本來の機能に本質的なものでないことは明かである。劉復のｘｘ、ｙｙの線の解釋はよく考へたものであるが、劉復の拓本による實測の結果も示すやうに、肝腎なこの線分の位置は四ヶ所について二〜三ミリ程度の誤差がある。この點を時刻の目盛の正確さと比べた時、劉氏の説明も腑に落ちない感を懷かせる。或ひは劉氏の考へたやうな用途があつたにせよ、これが正方形の格――劉氏はこれについては説明しない――の外に加へられ、丁度鏡のＴＬＶと同じ式の圖柄を構成してゐるについては、そのやうな圖式が別にあつて、

それがここにも實用の意味もかねて裝飾として應用されてゐる、とみた方がよいのではなからうか。

ここに問題の方格規矩の圖柄が鏡だけでなく、また漢時代に流行した「六博」と呼ばれるゲームの盤にも認められ、兩者關係があることは早く平山が注目してをり[8]、またカプランも[9]鏡の角張つたTLV紋は鏡の圓形の中では落附きが惡く、六博の方形の盤の中の方にふさはしいから、その方に由來するであらうことを推測してゐる[10]。

六博のゲームに興ずる光景は畫像石に多く畫かれてゐる。圖6はその一例である。ゲームのやり方については楊聯陞、水野清一、勞榦らの研究があつてかなり[11]の程度わかつてゐるのであるが、この論文のテーマとは直接關係がないからくはしくは解說しない。この畫像石に畫かれた六博のゲーム盤(局)の遺物の一例を引くと圖7のごときものである。鏡の場合、周圍が圓形である所が、この方では方形になつてゐるといふ違ひがある。楊聯陞は鏡の方格規矩の圖柄はこの博局から借りたものと考へてゐる[12]。然しこれは從ひ難い。六博は圖6の畫像石にみるやうに二人が局をはさみ、大きい方の盤の上に畫かれた六本の「箸」——目のある四角柱狀のさいころの一種——を投げ、出た目に

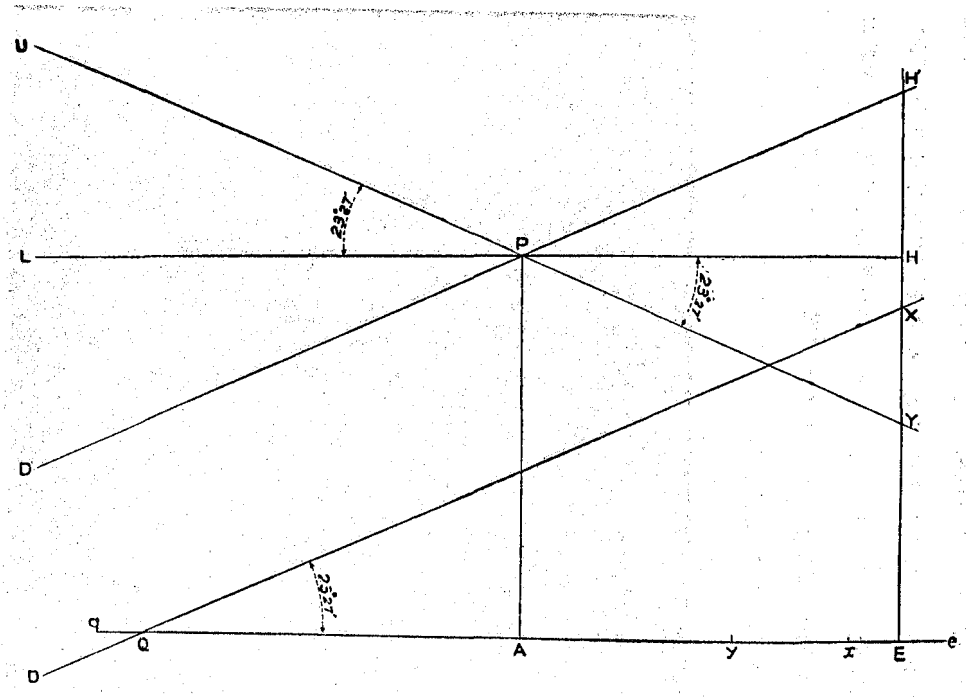


圖5　冬至，夏至において漢日時計「游表」上にさす「表」の影

從つて方格規矩紋のある局上に棊を動かして勝敗を決するのである。棊は圖6では兩人の前の側に、短い線で六本づつ畫かれてゐる。實際は白と黑の材料、例へば洛陽西郊七〇二四號漢墓出土の例[13]でいへば象牙と黑石で作つた長さ三センチばかりの駒である。

このやうな駒をどういふルートで動かしたかについては明かにされてゐないが、どう動かすにせよ圖6、7にみるやうな、所謂方格規矩紋はそのゲーム盤として不適當なことだけは明かである。双六のやうなものに使はうといふなら、多少とも格子目に近い形に盤面を仕切つておくのが當り前だからである。[14]さうすると博局と鏡の双方に所謂方格規矩の圖柄があるのについては、駒井和愛がいつたやうに、[15]天地を象つたこのやうな圖があつて、それが博局にも鏡背にも日時計にも採用された、と考へるべきである。

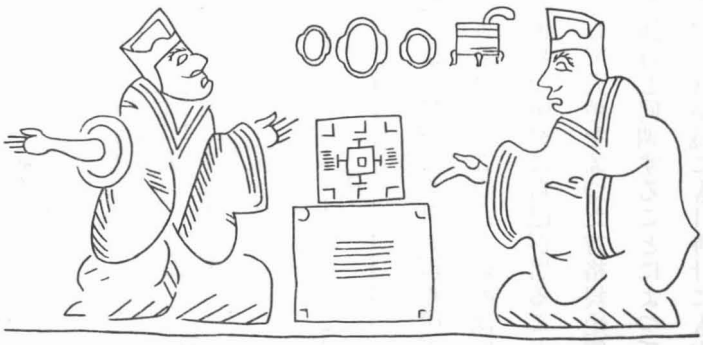

圖6　漢畫像石六博圖　傳山東出土　約1/4

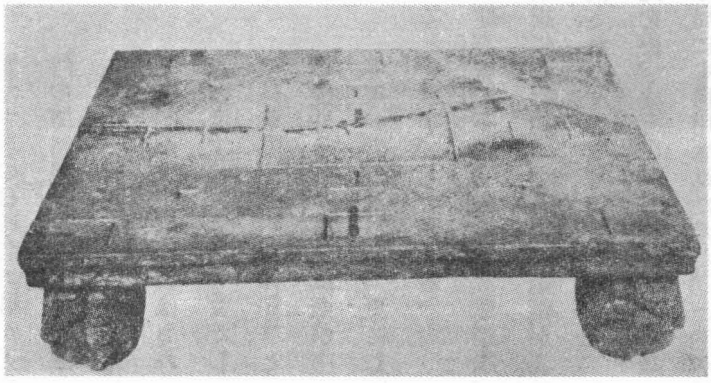

圖7　漢石製博局　費縣出土　約1/4

他に六博の局の所謂方格規矩の圖式について、勞榦はこれを中國古代の亞字形の宮室を象るものと考へた[16]（圖8）。正方形の各邊にT字形のついた形を、中庭とそれを圍む房室に見たてるのはいかにも無理である。これでは房室は外に向つて開いてゐるにかかはらず、中庭に向つて出入口が全くないことになるからである。

カンマンは[17]六博の局の方形が地の「方」を象り、

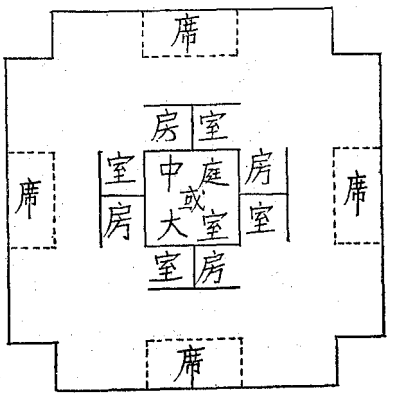


圖8　勞榦のTLV宮室起原説明圖

またさきの日時計の圓が天を象ることは大いに可能なことと推測し、ほぼ同じ圖柄の鏡の方格規矩紋も天地を象ると考へた。そして、四隅のV字形は地の四方に擴がる「四海」を區切るもの、方格の四方につくT字形は地の四方の果にある門を象るとみる。門がT字形で表はされるのは、入口の兩側に塔狀の觀の立つた門で、縱棒は通路を表はす、とする。[18] またL字形については、それが「四海」の果にあることから、その外を限る關門 barrier と見る。それがL字形に表はされてゐる理由の説明は、四方の域外から四方の風雨が中國に吹き込むやうに、完全には閉されてゐないことを示す、等等、少少苦しい。更にL字形の下に鳥が表はされてゐる例を引き、それは鶴で、これによつて四海の外が濕地帶であることを示す、と説明する。

カンマンがこの式の鏡の銘に「左龍右虎辟不祥、朱雀玄武順陰陽、子孫備具居中央」[19] といふいひ方は、これら四神の配された世界の中央に自己が居ることを前提にした句で、方格規矩鏡が天地宇宙を象るといふ自分の考へを裏づけるものだ、といふ。[20] そして天地を象つた方格規矩鏡に寫されたやうな宇宙圖があつて、このやうな圖を自分のものとし、その中に身を置いて宇宙の運行と同調することによつて不死を得、立身出世、物質的幸福などを思ひのままにすることが出來るといふ思想があつたので、これが鏡にも日時計にも六博の局にも應用されたのだ、と考へてゐる。

思ふに、カンマンが方格規矩の圖柄が宇宙を表はす圖式だと考へた方向は誤つてゐない。またそれが漢代のどのやうな思想に基づくものかについての解釋も肯綮に當つてゐる。然し、圖柄の個別的な部分の形の解釋には贊成しかねる點が多い。中央の方形が地を象るのはよいとして、四隅のV字形は四海を限るものであるからVの中はブランクで何もないといふが、これは方格規矩四神鏡についてはいへても、より古い四龍と組合せたものには當てはまらない。V字形の中に龍が足をふみ込んだりしてゐるからである（圖2）。T字形、L字形が門を表はすといふのも何とも無理な説明としかいひやうがない。

これら先人の説は顧慮せず、この圖柄について駒井和愛は次のやうにいふ。[21]

凡そ古代に天を圓いものとし、地を方なるものとし、之に規と矩とを配するやうな見方は、甚だ多く行はれてゐた。されば件の鏡のT、Lが地の四方、天の四方を表はしたものであることは疑を容れない。またVは天の四維を示したと見ることも出來る。而してVは隅角を表はしたものの如くであるから、上記の文様は細かくは規矩隅角文とも云ふべきであらうと。鏡の圓と、中に表はされた正方形が天圓地方を象るといふ説明はよいとして、規(コンパス)は圓、矩(曲尺)は方を夫々象徴するとすると、どうして規——駒井氏はT字形をこれに當てる——が地の正方形の方に、矩(L字形)が天の圓の方に加へられるのか、説明がない。第一、漢のコンパスは畫像石の伏犧女媧圖で女媧が持つものをみると4字形をなしてをり(圖9)、T字形でない。そもそもT字形のコンパスといふものは考へ難い。またなぜ天の四維ないし隅角がV字形で示されねばならないのか。維にしても隅角の印にしても、圖で示すなら一本の直線の方がふさはしいのではなからうか。

ブリング[22]は春秋戰國から漢の鏡背紋の幾つかの型式について、それが「蓋(きぬがさ)」ないしは藻井を象る、といふ解釋の原則を案出した。問題の方格規矩鏡についても、鈕を見掛屋根、その周圍の方形を天窓、藻井を象ると見、T字形、V字形はこれを支へる柱や腕木であるとする説明を試みてゐる。またこの圖紋は全體で天地を象つた「蓋」になぞらへたもので鈕は昆侖山、方形はその基、周縁の鋸齒形は世界の果を限る山等を表はす、と解してゐる。

圖9　女媧の持つ「規」　嘉祥武氏後石室第五石　約1/2

ブリングが強調するごとく、古代中國において「蓋」が貴人の特權的地位を象徴し、また天が「蓋」と表象され、一方車蓋など「蓋」が天を象ると考へられることもあつたことは確かである。また鏡背紋に天象ないしは天地を象るものがあることも確かである。然しそのやうな圖柄は本來「蓋」のみに排他的に使はれたものだといふことが證せ

られてゐない以上、鏡背紋は「蓋」から採つたのだと解するのは無理である。從つて藻井の建築材としてのT、V字形の解釋も到底成り立たない。

方格規矩四神鏡の圖紋について中山は古く[23]

……宇宙が此狹き鏡面に疊み込まれて居るのを感ずるのであつて、鏡の圓きは天を表はし、方形格の方なるは地を象つて居るらしく、方形格あるものに多く十二支文字が配されて居るのも之が爲であると思はしむる

と言つてゐる。このことは前引の諸說も一致してをり、動かない所と思はれる。案ずるに『呂氏春秋』十二月紀、序意に

文信侯曰、嘗得學黃帝之所以誨顓頊矣、爰大圜在上、大矩在下、汝能法之、爲民父母、

と、卽ち文信侯がいつた。自分はかつて黃帝が顓頊に敎へた所を學び知つた。つまり、大きな圓（天）は上にあり、大きな四角（地）が下にあるが、お前がこれに法ることができれば、民の父母となることができる、といふ。天地に法ることができれば、といふ所を大圜、大矩といつてゐる。[24] また『淮南子』本經訓には大體同じことを記して

戴圓履方、抱表懷繩、[25] 內能治身、外能得人、發號施令、天下莫不從風

と、卽ち、圓卽ち天を頭にいただき、方卽ち地を踏み、正しく東西南北の方向を體すれば、內は身を治め、外は人を得、天下に號令を下してもみなその風化に從はせることができる、といふのである。實際に天地に則り、その運行に合體することは困難としても、容易に手にすることができる鏡に天圓地方が象つてあれば、やはり天地を擬制的にでも我がものとすることであり、それはやはり效力があることと考へられたに違ひない。方圓の圖式が鏡につけられたのは右のやうな意味があつてのことで、カンマンの考へたことはこのやうな同時代の文獻資料によつて裏づけられるのである。もつとも、漢代の人がみな『淮南子』や『呂氏春秋』に記されるやうな高級な政治的理想を懷いてゐたわけではない。方圓の圖式を身に體した結果獲得した能力によつて達成を願つたことは、圖13の鏡に鑄出されてゐるごとく「日利萬大、家富千金」といつた誠に現實的なことだつたのであるが。

鏡の中の正方形が地を表はすことが知られれば、各邊の中央に外に向つて出るT字形が何であるか、簡單に解釋がつくはずである。これは四極である。『論衡』談天に

儒書言、共工與顓頊、爭爲天子、不勝、怒而觸不周山、使天柱折、地維絶、女媧銷煉石、以補蒼天、斷鼇足、以立四極

と、卽ち儒家の書に次のやうにいふ。共工は顓頊と天子になることを爭ひ、負けた。そこで怒つて角で不周山を突き、天を支へる柱を折り、地をつないだ綱を切つた。女媧は煉石を熔かして蒼天の穴をふさぎ、鼇(大きな龜)の足を切つて四極を立てた、と。[26]

共工が破壞する前は不周山(崑崙の西北にある山といふ)[27]に柱が立つて天を支へてゐたらしい。これが折れ、天に穴があいたので女媧が修繕したわけである。鼇の足を切つて極を立てた、といふが、これはどういふことか。極とは棟とか梁の意味があり、[28]垂直の柱でなく、柱上に水平に渡される梁材である。鼇の足で四つの極を立てた、といふのは四本の極を鼇の足を柱にして柱上にあげた、といふ以外に考へ様がない。四極とはもちろん東西南北の四方の果にある極である。『淮南子』墜形訓「墜形之所載、六合之間、四極之內」の高誘注に

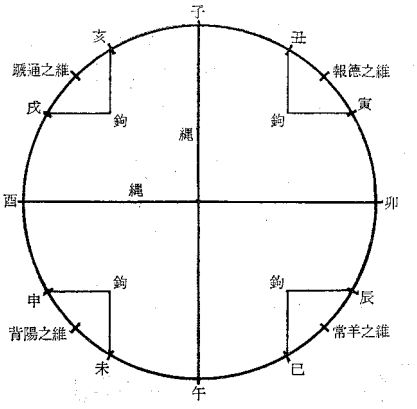


圖10 『淮南子』天文訓の方角名稱圖

四極、四方之極、無復有外、故謂之內

と、卽ち四極とは四方の極で、それ以上外がない。故に「內」といつたのだ、といふ通りである。鏡の圖紋で、正方形を以て象られた地の四方の果に出るT字形は、水平の梁である極と、それを支へる柱なのである。勿論實際には柱は四邊の中心から天に向つて垂直に立ち、その上の極は圓い天を支へると表象されたはずであるが、うまく表はせないため便宜上外に向つて倒した形に畫いたのである。[29]鏡紋では地を象る方格の周邊沿ひに十二支の文字を入れる例が多いが、その配置は子卯午酉が四邊の中央に來て、その位置に四極が立つてをり地の實際の方角にも合せてある。

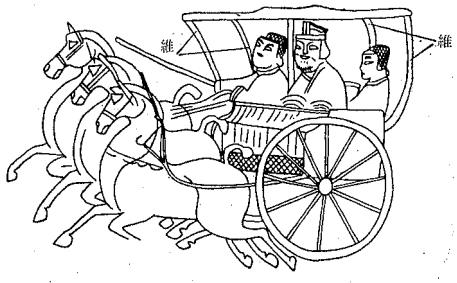


圖11　後漢の馬車の「維」

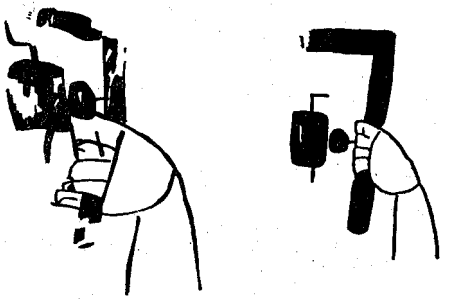

圖12　伏犧の持つ曲尺と墨壺　アスターナ唐墓出土　約1/6

なほ、方格規矩四神鏡の中には、T字形の代りに「一」字形の短い棒を配するものがあり、[30]前引日時計でもT字形に當る所は「一」字形になつてゐる。四極、卽ち四本の梁を文字通りにとるとかうなる。別に縱線を忘れたとか省いたといふわけでなく、これでもよいのである。星座の北極——今の北極星ではなく、子熊座のαβ等（圖22）は、少少反つてゐるとはいへ單純な竿狀をなした星座で、北の方にあり、天の圓運動の中心の近くにあつて空の屋根を支へる棟木、といふことで北極と名附けられたに違ひないが、これも棒狀をなし、これを支へる柱に當る星はないのである。

次は正方形で象られた地の外をめぐる圓形の天である。鏡では地の「方」に十二支で方角を記入したものはあつても、天の圓の方にこれを記入したものはない。然し、當然天にも方角があるから圖10のやうに記入してみる。さうすると、鏡紋にみるV字形は丑寅、辰巳、未申、戌亥の方角につけられてゐる、といふことが出來よう。『淮南子』天文訓をみると、今問題の方角には特別の名稱がある。卽ち

子午、卯酉爲二繩、[31]丑寅、辰巳、未申、戌亥爲四鉤、東北爲報德之維、東南爲常羊之維、[32]西南爲背陽之維、西北爲蹏通之維

と、卽ち子午、卯酉を二繩といふ。丑寅、辰巳、未申、戌亥を四鉤といふ。また東北を報德の維と呼び、東南を常羊の維と呼び、西南を背陽の維と呼び、西北を蹏通の維と呼ぶ、といふのである。圖10にはこれも書き込んだ。

所謂方格規矩の圖形で象られた宇宙では、方形の地の四方の果に柱が立ち、上に梁をのせてゐるのであるから、天は地球をとり圍む球形のものとしてでなく「天は蓋笠を象る」[33]といはれるやうな、「蓋」（ビーチパラソル狀のかさ）や頭にかぶる笠のやうな形のものとして表象されてゐることは疑ひない。東北、東南、西南、西北の方角が何何の維と名づけられてゐるのも、馬車に立てられる「蓋」の四方をつなぐ維（圖11）になぞらへたものに違ひない。

ところで、この四つのつなぎひも維を挾む丑寅、辰巳等等が「鉤」と呼ばれてゐるのであるが、これも「蓋」につけ、維をつなぐ裝置に「鉤」といふものがあつて、それで「鉤」と名づけられたのでもあらうか、これは定かでない。[34]とも角、方格規矩の圖式ではこの「鉤」と呼ばれる位置にV字形のかぎの手が配されてゐるのである。このかぎの手が天の圖表（圖10）で「鉤」と名づけられたものを表はすことは疑ひなからう。

さうすると子午、卯酉の「繩」に當る所にあるL字形は何か。「繩は直なり」と注されてゐる所からも知られるやうに、この「繩」はただのなはではなく、直線を引くために引張る糸ないしなはである。圖12はスタインのトウルファン、アスターナ唐墓發見[35]の伏羲女媧像の棺覆ひの伏羲像の持つ曲尺と墨壺の圖である。曲尺の左下が墨壺で、矩形に表はされ、L字形の把手のついた絲卷から、墨をひたした綿の入つた圓形の容器中を通つて絲が出る仕掛で、我國の大工も使つてゐるものであるから説明にも及ぶまい。新疆省ではこの圖とよく似た型式のものが今日も使はれてゐるといふ。[36]唐代にこの式の圖像では直線、卽ち「繩」が墨壺で象徵されてゐるのである。戰國—漢時代に墨絲の類がどのやうな仕掛になつてゐたか明かでないが、やはり「繩」がこの類の長い直線を引くための道具で象徵されたといふことは大いにありうることである。さきの天文訓の圖式の「繩」に該當する所に鑄出されたL字形は、この墨絲のクランク附の絲卷を、極く象徵的に表はしたものと考へられるのではなからうか。

以上、所謂方格規矩の圖柄は次のやうな宇宙像を表現してゐることが明かになつた。卽ち、大地は正方形をなし、その東西南北四方の果てには柱が立つてその上に梁、卽ち極が載り、これで天が支へられてゐる。天は「蓋」（かさ）の形をなし、子午、

卯酉、卽ち眞北と眞南、眞東と眞西を夫々結ぶ線は「繩」と呼ばれ、その端の點は絲を卷くL字形の絲卷が配される。蓋狀の天の東北、東南、西南、西北に當る所には、當時の馬車の「蓋」と丁度同じやうな具合に、このドーム狀の天をつなぎとめる紐が出てゐて、これが「維」と呼ばれる。またこの「維」を中にし、丑と寅、辰と巳、未と申、戌と亥を連結する鉤の手狀のものがあり、「鉤」と呼ばれる、といつた所である。

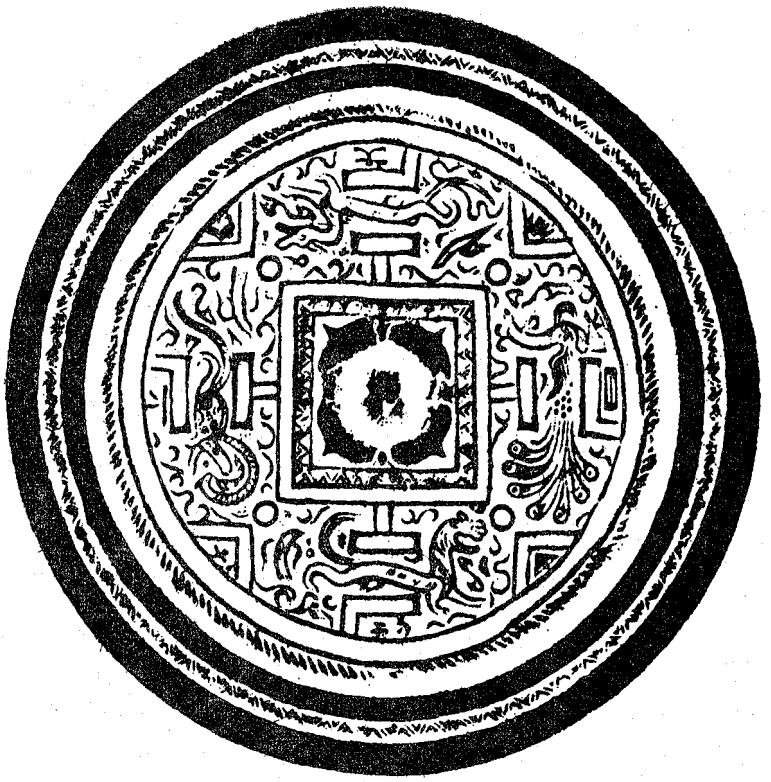

圖13 方格規矩四神鏡 約2/3

## (2) 四神圖

次に方格の周圍に表はされた動物形の圖像について檢討してみよう。普通に多くみる例では、方格の各面は中央にT、L字形が入るために二分され、四面で計八つの隙間ができ、そこに四神と他に四種の動物が納められてゐる（圖1）。とはいへ、その中に多くの場合共通して見出される龍、虎、鳥、蛇の絡んだ龜の像がその主役であり、これが五行說で東西南北に割り振られた青、白、朱、玄の四色の名を冠して呼ばれた青龍、白虎、朱雀（鳳凰の類）[37]、玄武（龜と蛇の絡んだ像）[38]であることは疑ひない。この式の鏡で銘文に「左龍右虎辟不祥、朱雀玄武順陰陽」などと明記される例も多いのである。

この式の方格規矩四神鏡は前漢末から王莽の新の頃には型式が完成し、中には四神とそれと組をなす動物像が方格の角、V字形を挾む方式のものも多く作られてゐるのであるが、[39]これよりやや遡る例では、圖13のやうに、L字形をまたいで方格の四面の長さ一ぱいに大きく四神を扱つたものがある。數は多くないが、これが方格規矩四神鏡の祖型といへよう。ともあれまづ四神とは何を表はしたものかを明かにしておかう。

年代のはつきりした文獻で四神に言及する最も古いものは、淮南王劉安が編纂して前一三九年に獻上した『淮南子』である。[40]同書、天文訓に

何謂五星、東方木也……其神爲歲星、[41]其獸蒼龍……南方火也……其神爲熒惑、[42]其獸朱雀……中央土也……其神爲鎭星、[43]其獸黃龍……西方金也……其神爲太白、其獸白虎……[44]北方水也……其神爲辰星、[45]其獸玄武

といふ。何を五星といふか、といふ書き出しで始め、各方角に歸屬する木、火等等の元素その他を擧げ、それに屬する惑星と「その獸」とを列記する體裁である。すると「その獸」とはその方角に割當てられた神である特定の惑星を象徵する獸、と解釋される。

やや時代が降り、司馬遷の編纂した『史記』の天官書になると、これとはまた違つた考へが見出される。天官書は「中官、天極星」、「東官、蒼龍、房、心」、「南官、朱鳥、權衡」といふやうに、星座を中、東、南、西、北の五官[46]に分け、各官に區分けされた星座を總稱する時の呼稱、それを代表する星座名を最初に擧げてゐるのである。「中官は天極星」といふのは他と體例が違つてゐるが、他は「東官は蒼龍の宿で、房、心がその代表である」[47]といふ式のいひ方である。所で天官書の蒼龍については『索隱』に

爾雅云、大辰、房心尾也、李巡曰、大辰、蒼龍宿體、最明也

と、卽ち、『爾雅』はいふ、大辰は房と心と尾である。また李巡はいふ、大辰は蒼龍の宿の體で、最も明るい、と。房、心、尾は今のさそり座に當る星座であるが、蒼龍の宿の體で、全體合せて大辰と呼ばれたことが知られれる。『左傳』桓公五年の

「龍見而雩」の注には「龍……蒼龍宿之體」といふから、大辰が古くより龍と呼ばれてゐたことが知られる。蒼龍と總稱される一群の星宿の體は今のさそり座に當る龍といふ星座であることが知られる。

朱鳥については天官書に

柳爲鳥注、主木草、七星頸、爲員官、主急事、張素爲厨、主觴客、翼爲羽翮、主遠客

とある。索隱に

案、漢書天文志、注作咮、[48]爾雅云、鳥咮謂之柳、孫炎云、咮、朱鳥之口……

と。卽ち、案ずるに『漢書』天文志には「鳥注」の「注」の字を「咮」に作る。『爾雅』にも鳥咮はこれを柳といふ、といふ。また孫炎は咮は朱鳥の星座の口だ……といふ、と。柳といふ星座（うみへび座、$\delta$、$\omega$、等等）[49]は朱鳥の嘴だといふのである。『索隱』はまた

案、宋均云、頸、朱鳥頸也

と。卽ち、案ずるに宋均はいふ、「頸」といふ星座は朱鳥の頸だ、と。頸（うみへび座、$\tau_1$ $\tau_2$等）[50]は朱鳥の頸だといふのである。また「張素」の素は索隱に「嗉なり」といふ。[51]張（うみへび座の$\lambda$、$\mu$、$\kappa$等）[52]は朱鳥の飼袋だといふこと。また翼（コップ座）[53]は朱鳥の羽根だといふのである。以上、柳から翼までが朱鳥に見たてられてゐたことが知られる。この「鳥」も星の並び方によつて名づけられた、二十八宿とは別の星座名である。

『史記』天官書には次の西官を總稱する名稱する名稱としては四神の名が記されてゐず、それを代表する星座名の咸池がいきなり記される。然し西官の項の星座の記述中には

參爲白虎

と、卽ち參の星座は白虎だとあり、參、卽ちオリオンの三つ星が白虎とされてゐる。この三星は一向に虎らしい形をしてゐない。これが虎に見たてられたのが古くよりあることか、五行家の案出したことなのかは明かでない。

北官の項目の下にはこれに屬する星座を總稱する名として玄武が、それを代表する星座として虛、危が記される。『索隱』に

爾雅云、玄枵、虛也、又云北陸、虛也……

と、卽ち、爾雅にいふ、玄枵は虛のことである。またいふ、北陸は虛のことだ、と、と。中官、東官の體例から類推すると、この司馬貞のいひ方は玄武といふ星座が玄枵、卽ち虛だ、といふことを說明してゐるのである。天官書の「虛危」の下の正義には

虛二星、危三星爲玄枵

と、卽ち虛の二星と危の三星を合せて玄枵といふ、といふ。玄武の場合だけはどの星宿が玄武なのか、本文からは知られないのであるが、この解釋に從ふとすれば、玄武も蒼龍の場合と同樣、その方角に屬する星座を總稱する名に當る星座と、それを代表する星宿が一致してゐることになる。虛、危はこうま座のα、みなみの魚のα、β　ペガサスのε　ϑの五角形をなす五星である。[54] 虛、危の形は龜の甲の形ともみられる。然し白虎の場合と同樣、この場合もこの星座がいつから龜にみたてられたか明かでない。

以上、天官書の記載は中官、東官、南官等と星座を方角によつて區分し、各々の始めに各官に屬する星座を總稱する星座名を擧げるのであるが、蒼龍、朱雀、白虎などには方角によつて區分された一群の星座中にそれに該當する星座があり、前二者は漢よりも古くから龍、鳥にみたてられてゐたことが知られる。[55] ただ西方のみは始めに代表する星座名として咸池があげられて四神名の總稱がなく、白虎は本文中に出てくる點、體裁が整つてゐない。

所で次のことは注目に價する。卽ち、淮南子が五行に配された五つの惑星をあげ、その獸として五獸を數へるのに對し、さう時代の隔らない天官書では、恆星を中および東西南北の五つの官に區劃し、四方の各々に蒼龍、朱雀、白虎、玄武など四神の名をもつてする各官の總稱を各官の目のすぐ下に注記してゐることである。ここにみたやうな『淮南子』と『史記』天官書

のシステムの相違、天官書の記載の不統一などから考へると、この時代には四神は天の四方に割當てる點では一致しても、それをどのやうな星に割り振るかについては、未だ定說といふものが成立つてゐなかつたと考へられる。

このもたつき加減は、次に引く後漢の王充の『論衡』の整正な論調と比べた時、更に目立つて印象づけられよう。同書、物勢篇には、

東方木也、其星倉龍也、西方金也、其星白虎也、南方火也、其星朱雀也、北方水也、其星玄武也、天有四星之精、降生四獸之體、含血之獸、以四獸爲長

と。天の四方に蒼龍白虎等々といふ星があり、その精が地に降ると夫々の名の動物が生れる。生き身の動物はこれら天から降つて生れた四種の動物を首長とする、といふのである。四神の名の星は淮南子の惑星說でない。天官書の恆星說は『漢書』にも引つがれてをり、趨勢はその方に落ちついていつたやうである。また『三輔黃圖』、未央宮の條に

蒼龍白虎、朱雀玄武、天之四靈、以正四方、王者制宮闕殿閣、取法焉

と。蒼龍白虎等天の四靈は四方を正す。王者は宮闕殿閣などを作るのにこれに法る、といふのである。これも天の四靈が惑星であつては不動の建築物とイメージが合はない。

圖13の鏡にもどると、ここで地を象る方形の外、蓋狀の天を象る圓の四方に表はされた四神の圖は、天の東西南北に在る夫々の名の星座の精が、四種の動物の形で、夫々が實際に占める位置に表はされたものであることが明かにされた。

なほ、さきに注目した『淮南子』天文訓、『史記』天官書からうかがはれる、その時分の四神についての解釋の流動性は、方格規矩四神鏡成立の時期と考へ併せると興味深い。卽ち、所謂方格規矩をもつて表現された天地四極の圖形は早く戰國後期の四龍を飾つた鏡に出現し、前漢中期頃の葉紋鏡などにも用ゐられるのであるが、これが四神と一緒に用ゐられ、方格規矩四神鏡が出現するのは前漢後期からである。そもそも四神が四方の神として揃つて圖像に表はされるやうな例は、方格規矩四神鏡が最初のやうである。[56] 勿論龍、虎、鳳凰、龜など個個の圖像的表現は殷に遡るのであるが。ところでこの式の鏡が出てくる

すぐ前、紀元前一〇〇年前後の時代には四神の解釋にまだ統一がなかつたとなると、四神鏡が出現し、この式の鏡が盛に使はれるやうになつたのは、恐らく四神の何たるかについてそれまで存在した若干の混亂も解消し、それが普及し出した時期と一致すると考へることができるのである。(57)

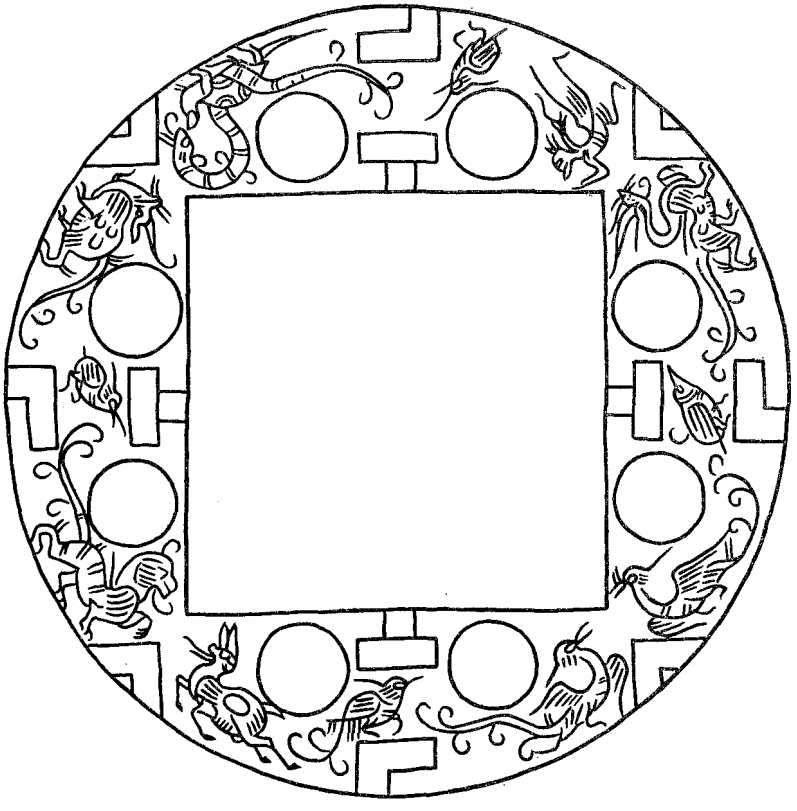

圖14　方格規矩四神鏡內區の四神他　約1/1　京都國立博物館藏

さて四神の何たるかがわかつたので、次に方格規矩四神鏡で四神と他の動物像が組合せられたものの考察に移る。鏡紋では青龍、白虎、朱雀、玄武はそれだけで純粹に用ゐられる例は多くなくて、多くの場合他の動物と組合せられてゐる。(58) 鈴木博司はこれらは注(57)に引いた『周禮』の旗に關する記載で交龍、熊虎、鳥隼、龜蛇といふやうに組合せて用ゐられた動物の圖柄から四神だけが獨立し、新たに他の動物と組合せられるやうになつたもの、と考へてゐる。(59) 『周禮』に記される旗の圖柄と問題の鏡の四神圖の關係は、前者の圖像的資料が缺如してゐるため、立ち入つた考察を加へることができない。これはしばらくおくことにする。

鏡の圖像そのものを觀察してみるに、前漢末から王莽の頃に型が出來上る類では、四神の夫々に大體

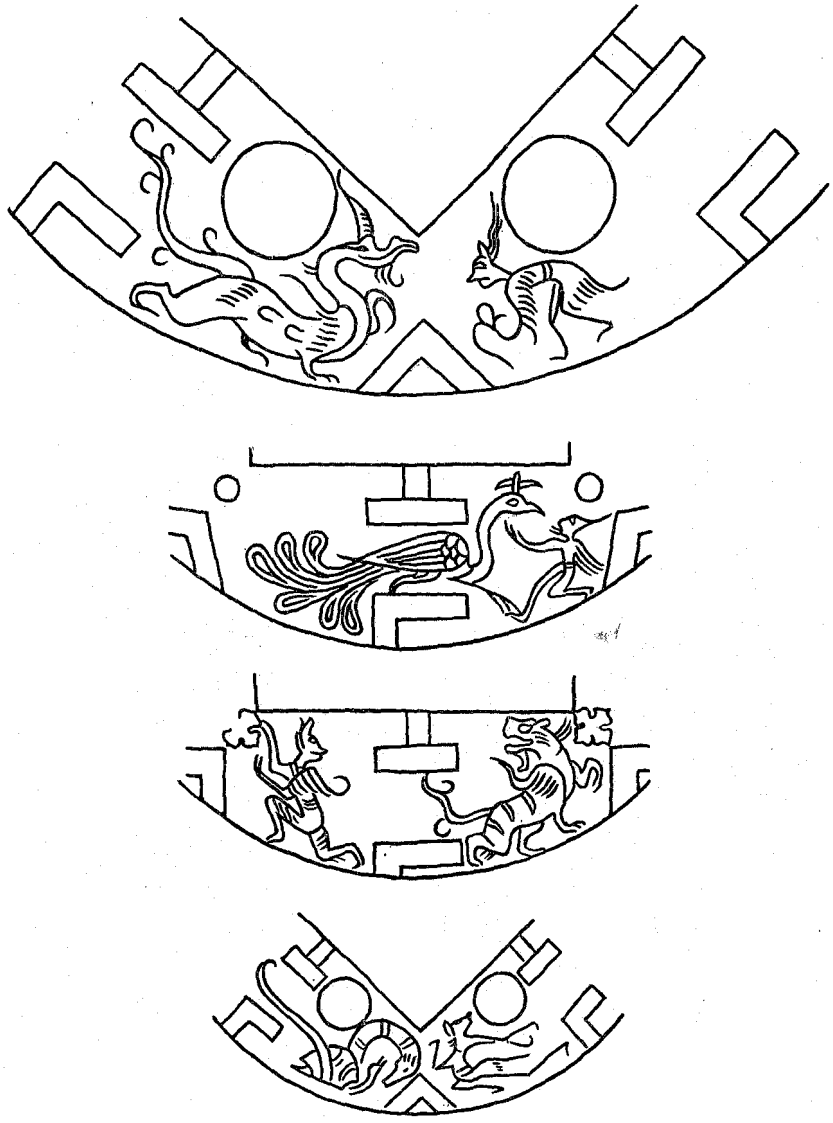

圖15　方格規矩四神鏡の四神と神人　約1/1



決つた對手があるやうに見受けられる。青龍と神人、朱雀と鳥、白虎と麞ないしこれに騎る神人、玄武と一角獸、といふところである（圖14）。四神がさきに見たやうに天を東西南北四つに區切つた夫々の星宿の精で、天上にある星座を表はし、これらが天を象つた圓の中で夫々のあるべき位置に配されてゐるとなると、これら四神と組になつて圖像が畫かれてゐる神人、鳥、麞、一角獸なども、天にある星座ではないかと一應考へられるが、これはさうでない。四神と組になつて表はされる動物像は他にもいろいろあるが、それらが星座だといふ話は一向に出てこないからである。

さうすると、四神と組合せられた圖像には別の意味があつたとせねばならない。例へば一つの方角のみに排他的に現れる動物がある。獅子が白虎とのみ組合せられ、人首鳥身の神や人首獸身の神が南のみに配されるごときである。これらについてみると、例へば獅子は西域に產するから西方の白虎と組合せられてゐる、といふやうに解釋することも可能である。

また龍に組合せられた神人には龍に向つて芝草の類を差出すものがある。さうすると、この神人は豢龍氏とでも考へることができようか。然しながら神人は龍ばかりか、朱雀にも、白虎にも、玄武にも伴ふ例がある（圖15）。これらが豢龍氏でなければ、龍に伴ふものについても別様な解釋が必要である。

玄武にはよく蛙が一緒に表はされてゐる（圖16、下）。これが蟾蜍だとすると、蟾蜍は月に棲み、陰の動物だから北方の精である玄武と性質が共通する所から一緒に表はされてゐる、と考へられないであらうか。これも否である。蛙の姿は南方の朱雀とも、西方の虎とも一緒に表はされる例があるからである（圖16、上、中）。ここに擧げた神人や蛙以外にも、一つの方角だけでなく、二つ以上の方角に表はされる圖像は熊、羊、鳥[60]等多多ある――といふより、始めに引いた獅子、人面の鳥や獸が例外なのである。するとその動物に伴ふ傳說上ないし性格の上のつながりから、それがその方角を代表する四神の一つと組合せられてゐる、といふ解釋も一般的には成立しえないことになる。四神と豐富な種類の動物が組になつて表現されるのが、方格規矩四神鏡のみに限られる

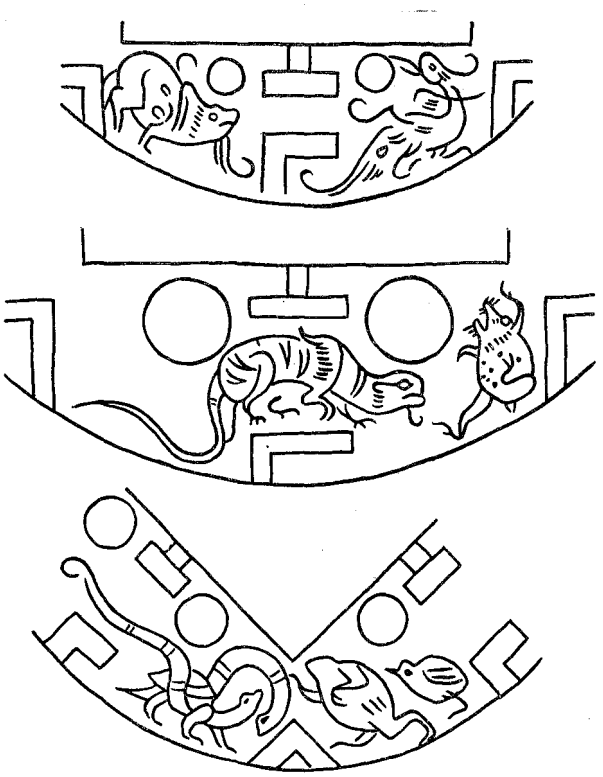

圖16　方格規矩四神鏡の四神と蟾蜍　約1/1

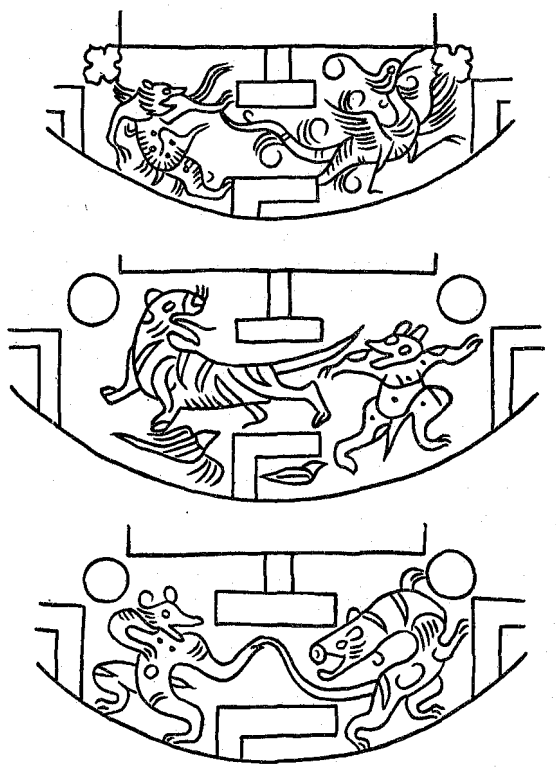

圖17　方格規矩四神鏡の四神と熊　約1/1

特殊な現象であることを顧慮すれば、このことは益々確かといへよう。

かうみてくると天の東西南北四方を代表し、圓形に表はされた天の當該の方角に配せられた四神に、星座と關係のない神人や動物、動物形の神が一緒に現れるといふのは、全く不思議ではないか。然り、これは不思議！と思ふのが本當なのである。同時代の人人もこれをみて當然これは奇蹟、と思つたはずである。古來不變であるべき星座の精の世界に神人や動物が仲間入りし、會話を交し、嬉嬉と戯れてさへゐる（圖17）。天上に起つた異常な光景といふ他ない。當時の人の感覺でいへば天上に符瑞が現れたのである。

符瑞といふと、例へば禹に聖德があつたので「白狐九尾の瑞」があつたとか[61]、季歷の十年に飛龍が殷の牧野にみちたが、「これは蓋し聖人が下にあり、將に起らんとするの符なり[62]」といふやうに、主君の德の高いことに對應して何かの異常な動植物が地上に出現するとか、將來起るべきよいことの前兆として不思議な現象が起る、といふ俗信である。前漢末にこのやうな迷信が流行し、それを利用して王莽が天下を奪つたことはよく知られる所である[63]。

今問題の方格規矩四神鏡の銘文には四靈について

左龍右虎得天菁（精）、朱雀玄武法列星[64]

と、卽ち東の龍、西の虎は天の精を得、朱雀と玄武は天の星を象る、と。また

左龍右虎掌四彭[65][66]、朱雀玄武順陰陽[67]

と、卽ち東の龍と西の虎は四方の方角[68]を掌り、朱雀と玄武は陰陽を順調ならしめる、と。また

左龍右虎辟不祥、朱雀玄武順陰陽[69]

と、卽ち、東の龍と西の虎は不祥を遠ざけ、……(以下前のものに同じ)とある。これによつてわかるやうに、天上の夫々所定の位置にあつて青龍、白虎、朱雀、玄武は天の四方を掌り、陰陽の働きを順調ならしめる、といふ使命を果してゐると信ぜられてゐたのである。符瑞の流行した前漢末から王莽時代の人人の目からみれば、地上にあつて天子がその德を磨き、政治をまともに行つたならば、當然その周邊に麒麟、鳳凰、龍などの瑞が現れるはずである。また天上にあつて不祥を遠ざけ、陰陽を順へ、大いに實蹟をあげてゐる四神がゐたとすれば、當然それらにもさういつた祥瑞が現れるべきである、といふか、さういふ四神は瑞獸と共に畫かれることによつてはじめてその精勵ぶりが象徵的な形に表現されえた、と考へられるのである。

これら四神と瑞獸の圖をみて漢人の思つたことはするとかういふことである。天上にあつて東西南北四方の精である四神は期待通りの靈威を發揮し、惡い影響を退け、陰陽の働きを順調ならしめてゐる。それが證據に彼等のもとに各種の瑞獸が現れて踊り、たはむれ、四神たちと會話を交してゐるではないか、と。

方格規矩四神鏡にあつて多くの場合四神と各種の動物が組になつて表はされてゐるのは、彼等の働きに應じて現れた瑞獸が一緒に表はされてゐると考へられること、以上のごとくであるとすれば、四神とそれ以外の動物の組合せが固定せず、流動性を保つてゐることも解釋がつくはずである。卽ち各種の瑞獸といふものは、夫々君主にどんな德があつた時に現れる、といふ特殊的な性質はもつてゐても、誰に對してどの獸が現れるといふことは決つてゐないからなのである。

四神以外の瑞獸にどのやうな種類があるか、それらが何と呼ばれたか、どのやうな性格をもつたものであつたか、等は興味深い研究テーマであるが、それには鏡紋以外の資料も併せて考察する必要があり、あらましの解明をするだけでもかなりの紙面を要することになる。それについては近く別の機會にとりあげて論ずることにしたい。

圖18　三段式神仙鏡　約1/2　Eugene Fuller 記念コレクション　シアトル美術館藏

## 三　三段式神仙鏡

次にもう少し時代の降る鏡をとり上げてみよう。三段式神仙鏡とは圖18—21のごときものを指す。[70] 例數はさう多くないものであるが、いづれも中央の鈕を挾む平行な二本の線をもつて內區を三段に分け、上、中、下各段に神像を配する。圖にみるごとく、像の方向は色色であるが、表はされてゐるものは大同小異である。銘文はあつても簡單な吉祥語の類で、紀年銘のものは知られない。然し圖像の表現、裝飾紋樣などからみて大體後漢末から三國にかけてのものと判定される。

### (1)　華蓋、天皇大帝

この式の鏡に表はされた諸神像のうち、鈕の左右に配され、衣の領から上に向つて長い飾りを飜へす神像が西王母、東王公であらうことは、畫像石などの例から誰しも容易に類推することができる。事實圖18、21のものでは、左の神像が頭上に「勝」を戴いてをり、確かにこれが西王母を表はしたものであることが知られるのである。それではその上下の段に表はされてゐるのは何か。これについては恐らく誰も論じた者がないのではなからうか。次にこれを考へてみたい。

圖19—21の上段の圖柄をみると、中央には蛇の絡んだ龜、卽ち玄武が居り、その背甲の頂上に柱が立ち、柱の上には管物の

菊の花のやうなものがみえる。鏡の中央の段、鈕の左右には東王公、西王母が表はされてをり、その上段に玄武がゐるとなると、この上段は北方の世界を表はしてゐるであらうことがまづ推測される。すると、ここに立つた柱と管物の菊の花のやうなものは何を表はしたものであらうか。玄武の背甲の上に立つた柱の頂につく所から、先づ植物のやうなものでないことは確かである。一見何か傘のやうな人工物を思はせる。花瓣のやうに末端が輕く反り上つたもので構成された傘のやうなものといへば、鳥の羽根で作つた「蓋」が起ひ起されよう。『說文解字』羽部に「翳は華蓋なり」といふものがこれである。華蓋といふものについて顏師古は『急就篇』の注に[71]

圖19　三段式神仙鏡の內區　約3/4
ボストン美術館藏

圖20　三段式神仙鏡の內區　約3/4　五島美術館藏

一曰、翳者謂華蓋也、今之雉尾扇是其遺象

と、卽ち一に曰く、翳は華蓋をいふなり。今の雉尾の扇はその遺象なり、といふ。その形を考へる上の參考とならう。卽ち、翳は華蓋のことだが、今の（唐の）雉の羽根で作つた扇はその形の名殘を傳へるものだ、といふのである。唐時代の雉の羽根で作つた扇の遺物は殘らないが、他の鳥の羽根で作つた扇なら今日でも中國にある。鳥の長羽を花の花びら狀にまとめたものである。華蓋はさうすると、美しい鳥の羽根を花のやうな形にまとめたかさである。今問題の鏡の傘狀のものが、管物の菊の花のやうに見えたのは、まさにこれが鳥の羽根で作つた花の形のかさ、華蓋を表はしたものであつたからに他ならない。

それでは華蓋は北方、玄武とどういふ關係があるのか。

『說文』前引の翳字の注に段玉裁は西京賦に「華蓋承辰」とあり、注に

薛綜曰、華蓋星覆北斗、王者法而作之

と、卽ち薛綜はいふ、華蓋星は北斗にさしかけられてゐる。王者はこれに法つて華蓋といふものを作つた、といふのを引く。華蓋星を手本にして天子用の華蓋を作つた、といふのである。華蓋星といふものは『史記』天官書にはないが、『晉書』天文志、上に出てくる。中宮の條に次のごとくある。

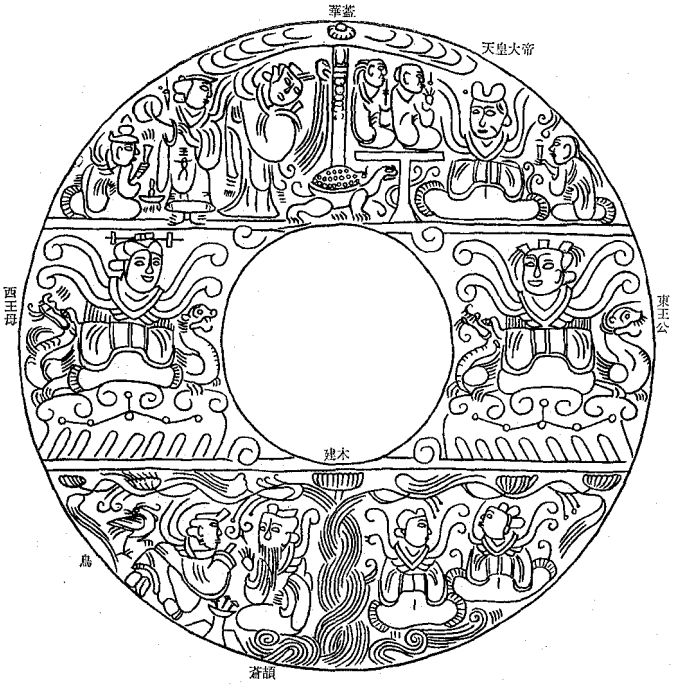


圖21　三段式神仙鏡の內區　約3/4　シアトル美術館藏

北極五星、鉤陳六星、皆在紫宮中、北極、北辰最尊者也、其紐星、天之樞也、天運無窮、三光迭耀、而極星不移、故曰、居其所而衆星拱之、第一星主月、太子也、第二星主日、帝王也、亦太乙之坐、謂最赤明者也、第三星主五星、庶子也、中星不明、主不用事、右星不明、太子憂、鉤陳後宮也、大帝之正妃也、大帝之帝居也、北四星曰女御宮、八十一御妻之象也、鉤陳口中一星曰天皇大帝、其神曰耀魄寶、主御群靈、執萬神圖、抱北極四星曰四輔、所以輔佐北極、而出度授政也、大帝上九星曰華蓋、所以覆蔽大帝之坐也、蓋下九星曰杠、蓋之柄也、華蓋下五星曰五帝內坐、設敍順帝所居也

と。卽ち、北極の五星と鉤陳の六星はみな紫宮の中にある。北極は北方の諸星の中で最も尊いものである。その中の紐星は天の樞である。[72] 天は極りなく運行し、日月星辰の三光は迭ひに耀くけれども、北極の星は移動しない。[73] 故にそれはその所にゐて衆星はこれに拱する、といはれるのである。北極の星座の第一星は太子で月を主管する。第二星は帝王で日を主管する。第三星は庶子で五つの惑星を主管する。中央の帝王の星が明るくない時は、天子は權威を失墜する。右の庶子の星が明るくないと、太子に憂ひごとが生ずる。鉤陳は後宮で、天皇大帝の正妃であり、その居所である。北極の北の四星を女御宮といひ、八十一御妻の象徴である。鉤陳の口中の一星を天皇大帝といひ、その神を耀魄寶といふ。群靈を統御することを主り、萬神圖を保持してゐる。北極の四星を抱く形になつてゐる星座を四輔といふ。北極を輔佐して制度を決めて政を授けるものである。天皇大帝の上の七星[74]を華蓋といふ。天皇大帝の玉坐を上からおほふものである。華蓋の下の九星を杠といふ。華蓋の柄である。華蓋の下の五星を五帝內座といふ。配置の順位は五帝の夫々が實際に居る場所の關係位置に從つてゐる、[75] と。ホー・ポン・ヨークの『晉書』天文志譯にそへられた星座圖によつてこの『晉書』に記される紫宮のあたりの星座を圖22にかかげる。[76]

華蓋といふ星座はここに引いた『晉書』天文志の文や圖22によつて知られるやうに、天の圓運動の中心の近くにあり、夫々日、月、惑星を司る帝王、太子、庶子とされる「北極」の星座、その妃や妾たち、諸諸の臣などに當てられる一群の星を含んだ宮殿である紫微宮の中にあつて、群靈諸神の總元締とみなされた今日の北極星、天皇大帝にさしかけられたものなのである。鏡の圖像で華蓋が玄武の上に立つてゐるのは、この華蓋が地上のものでなく、北極の華蓋であることをこのやうな形で表現し

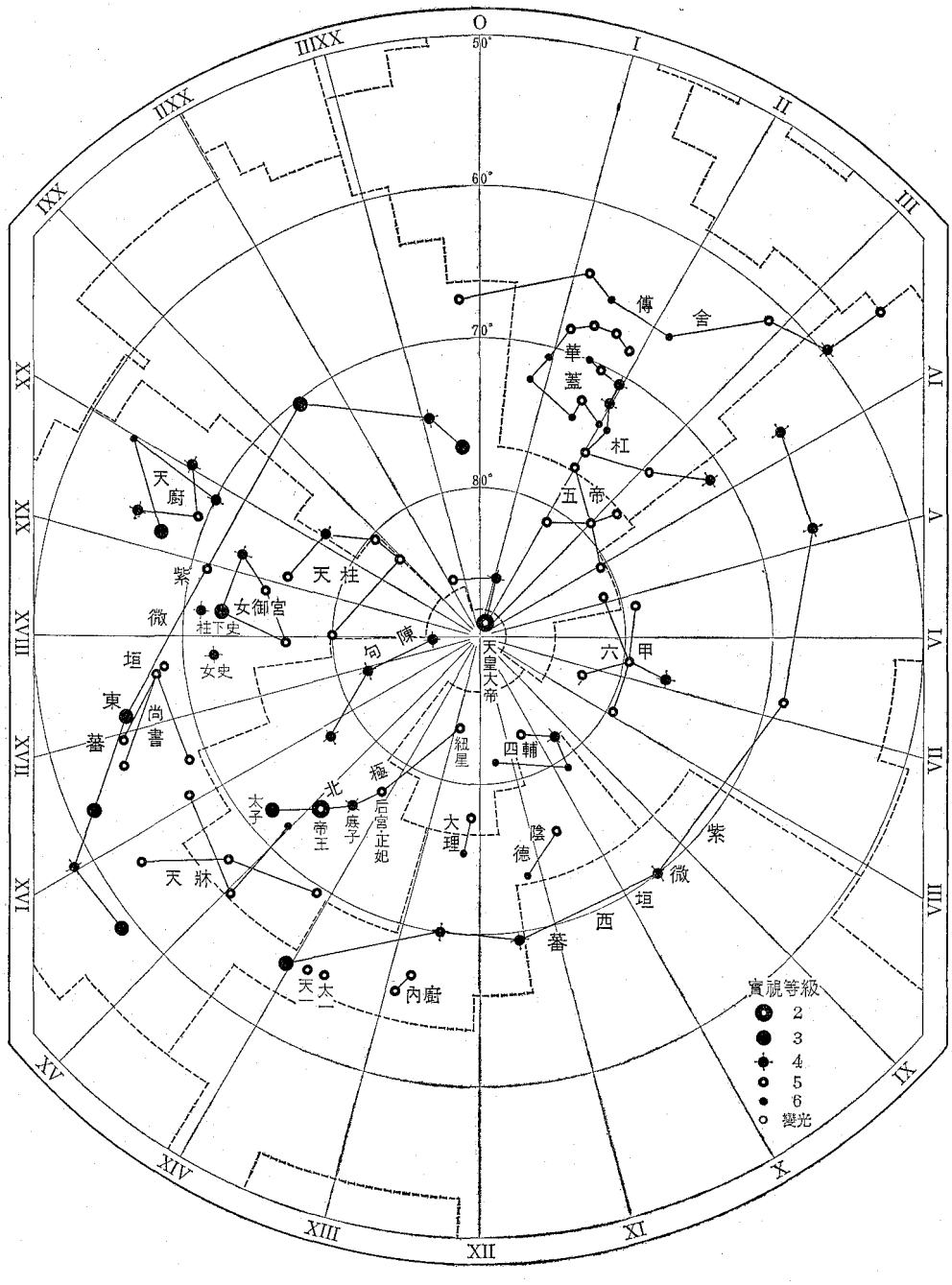


圖22　『晉書』天文志の北極附近の星座（Ho Peng Yoke による）

たものと考へられる。

なほ、ホー氏によつた圖22では華蓋の蓋の部分が妙に凸凹した形になつてゐるが、これは本文の「九星」は「七星」とすべきだと注意しながら、圖では無理に九個の星を拾つたからである。圖23は土橋八千太、スタニスラス・シュヴァリエが『欽定儀象考成』によつて作つた圖[77][78]により、圖22と同じ方法で作圖したものであるが、このやうに七星をとればきれいな形が出る。この方が正しいと思はれる。圖24はシュレーゲルが『天原暦理』によつて作つた圖[79][80]により、圖22と同じ方法で製圖したものである。華蓋の柄がひよろ長すぎる感じである。

ほかに、華蓋星を圖22、23のやうに取るにせよ、圖24のやうにとるにせよ、その柄は曲つてゐる。これは實際に用ゐられた

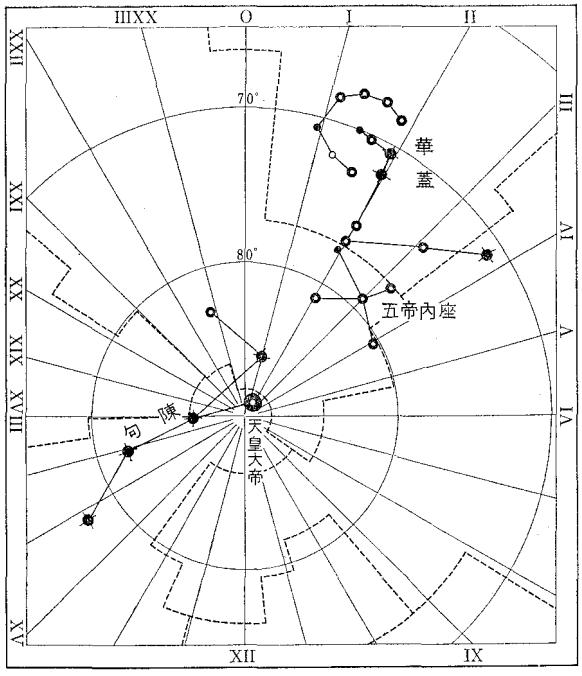


圖23　華蓋，五帝内座，鉤陳（土橋，Chevalier による）

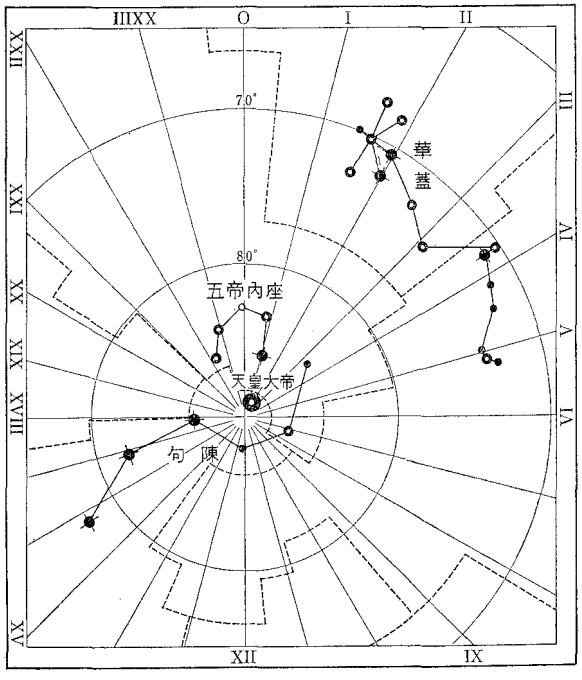


圖24　華蓋，五帝内座，鉤陳（Schlegel による）

圖25　雲南昭通后海子晉墓北壁壁畫（摹本）

蓋の曲柄になぞらへたものと思はれる。圖25は東晉時代の墓室に畫かれた壁畫であるが、大きく畫かれた主要人物の右に曲柄の蓋が見出される。當時の人は華蓋星をみてこのやうな柄の蓋を連想したに違ひない。鏡の圖柄では華蓋が眞直な柄の上にのつてゐる。これは華蓋が玄武の背甲上に立つやうに畫かれてゐることと同樣、この畫が象徵的な圖で星座の圖でないことを示すと解釋される。

さて華蓋の說明が長くなつたが、右の考へに誤りがないとすると、圖19—21の鏡の圖で、華蓋の橫に坐り、多くの臣を侍らせた神像は、今日の北極星に當る天皇大帝をおいて他に考へることはできまい。天皇大帝とは前引『晉書』天文志に「もろもろの神靈を統御し、やほよろづの神の圖像を保持する」といはれる。圖像を持つてゐるといふことはそれをコントロールする力と權限をもつてゐるといふことである。『五行大義』を引かれる『甘公星經』にはさらに、天皇大帝は五帝の尊祖だといはれる。[81] 世界中の神神や五帝などよりも更に上位に立つ、宇宙の最高神である。

『晉書』天文志によると鉤陳は天皇大帝の後宮であり、その居所だといひ、また鉤陳の（ひしやく形）口の中の一星を天皇大帝といふ、とある（晉書の本文の「口」字は或ひは「口」の誤りとも考へられる。さうとすれば鉤陳の圍の中の一星、といふことになる）。卽ち鉤陳と天皇大帝を明かに二つのものとして說いてゐる。この點土橋、シュヴァリエおよびホー氏の鉤陳と天皇大帝の取り方は合はない。シュレーゲルのやうに鉤陳と天皇大帝を分離し、鉤陳のひしやく形の口、或ひは圍ひの中に天皇大帝が入る形にとるべきであらう。

なほ圖21では華蓋と天皇大帝の間にT字形の臺座様のものがあり、上に二人の人物が坐り、大帝の方に向いてゐる。今のところこのやうな圖柄はこれ以外に知られてゐない。このT字形の臺座は何か。これは先にみた太子、帝王、庶子などを含んだ今日の子熊座に當る星座、北極ではなからうか。四極をT字形に表はす例は前の章で説明したところである。さうとするとこの「極」の上に坐るのはこの星座を構成する太子、帝王、庶子らを代表するものと考へられよう。

### (2) 蒼頡、神農

前節の考察によつて北および東西に當る上段、中段の神像が何であるか明かになつた。それでは下段は如何なる神であらうか。圖19—21その他の例でも、みな縒り合せた繩のやうなものを挾んで、同格と思はれる一對の像が表はされのが通例である。圖19の例をみるに、圖の方向でいつて右側、像の上下が正しい方向になるやうにしてみたら左側になる神は四目である。四目といふと直ちに思ひ起されるのは蒼頡である。『論衡』、骨相篇に

蒼頡四目、爲黃帝史

と、即ち蒼頡は四つ目があり、黃帝の書記になつた、といふ。蒼頡にはよく知られるごとく、鳥の足跡にヒントをえて文字を發明したといふ傳説がある。『晉書』、衞恆傳に

爲四體書勢曰、昔在黃帝、創制造物、有沮誦倉頡者、始作書契、以代結繩、蓋覩鳥跡、以興思也……黃帝之史、沮誦倉頡、眺彼鳥跡、始作書契、紀綱萬事、垂法立制

と、即ち、衞恆は『四體書勢』を著はし、次のやうに記した。昔、黃帝は制度を創め、萬物を造つた。沮誦、倉頡といふ者が居て、始めて文字を作り、結繩に代へた。蓋し鳥の足あとをみて思ひついたものである……黃帝の書記の沮誦、倉頡は、かの鳥の足あとをながめ、始めて文字を作り、萬事の秩序をたて、法を垂れ、制度を立てた、といふのである。また『廣韻』[82]に引かれる『世本』にも

圖26　蒼頡と神農　沂南畫像石墓　約1/6

圖27　蒼頡と神農　新津畫像石函　約1/10

## 沮誦蒼頡作書

といふ。

四つ目の神は沂南畫像石墓にもう一人の人物と向ひ合つて畫かれ、榜題に「蒼頡」と記されるが（圖26）、さきの圖19の神も蒼頡を表はしたものと見て差支へなからう。この圖26では左の神には榜題があるが、右の像の榜はブランクのままである。沂南畫像石墓の發掘報告にはこの右の像を前引の傳説で蒼頡と一緒に文字を發明したといふ沮誦にあてゐる。ところが、圖26ではこの沮誦とも考へられる神像は、手に植物をもつて蒼頡に向つて差出してゐる。植物はどうも沮誦の傳説とうまく結びつかないやうである。

漢代に蒼頡と向ひ合つて表はされてゐる者に神農がある。圖27がそれで、新津の石函の側面の圖像の左方から採つたものである。拓本では十分讀めないが、聞宥は左の榜題を「蒼頡」、右の榜題を「神農」と讀んでゐる。[83] 拓本にみえる筆劃からみてさう讀んでもよささうである。この圖像をみると、左の蒼頡が草の葉のやうなものを差出し、神農が葉の一枚を口に入れてゐる所と解される。聞宥はこれは神農が百草を嘗めてゐる所と見、沂南の今問題の圖像も同じテーマを扱つた蒼頡と神農の組合せの圖像とみてゐる。[84] 手に持つ物から判斷するに、圖26の沂南の畫像石の右側の像は聞宥のごとく神農とみた方がよく合ふ。

圖29、30の下段の同樣なコンビの間、圖21の左の二人の間には地上に植物狀のものが見える。これも圖26の神農の持つのと同樣、何かの藥になる植物と思

はれる。かうみると、今問題の鏡に現れる一對の神も蒼頡と神農とみてよささうである。

さうすると、圖19で蒼頡と向ひ合ふ像が何か上の少しふくれたものを手に持つのは、或ひは沮誦が筆を持つ所かとも考へられるが、これも神農が藥草の葉を持つと見た方がよからう。第一、筆であればふくらんだ所が下に來なければおかしい。蒼頡は何か節の幾つもあるものを摑つてゐる。これは或ひは結繩かもしれない。圖21では下段、左右に計四人の像がある。左の一對の像をみるに、右の一人は長いひげを生やし、手を前にあげる所、圖26の蒼頡と近い。[85] その左にその臣と思はれる者が拜謁する姿勢をとるが、その左上の隅に鳥が一羽歩いてゐる。蒼頡が鳥の足あとをみて書契を作るヒントを得た所かもしれない。よくみると圖19の神農の膝の前にも鳥の頸から上が表はされてゐる。スペースの加減で下部が飛んでしまつたのであらうか。

次に考へねばならないのは蒼頡と神農の間にある縒つた繩のやうなものである。圖26に引いた沂南の畫像石の蒼頡と神農の圖では、兩人は樹木の下で向ひ合つてゐる。鏡の圖柄では、圖19にみるごとく兩人の間にある繩狀のものの下端が同じ一本の纖維の束を折り返したやうに表はされてゐる例が多いが、圖20、21などは、さう思つてみれば下端が木の根の形になつてゐる。これはやはり樹木とみるべきである。圖21には左右に擴がつた枝にねむの花のやうな形の花や、鳥の羽根のやうな葉、何本かが一所から出る、長い柄のついた圓い實を認めることができる。幹や枝の形に相違があるとはいへ、全く同樣な形の葉や實は圖26の畫像石にも見出されるのである。

この木は何か。建木と呼ばれたものと考へられる。『淮南子』墜形訓に

建木在都廣、衆帝所自上下、日中無影而無響、蓋天地之中也

と、卽ち、建木は都廣といふ所にある。多勢の天帝が天に升つたり地に降つたりする通り道である。正午には影がなく、大聲を出しても反響がない。蓋し天地の中心である、といふのである。建木についてはまた『山海經』にも記載がある。海內南經に

有木其狀如牛、引之有皮、若纓黃蛇、其葉如羅、其實如欒、其木若蘆、其名曰建木

と、卽ち、木があり、牛のやうである。これを引張つてみると皮があり、纓や黃蛇のごとくである。その葉は羅のごとくであり、その實は欒のごとくであり、その木は藍のごとくである。その名を建木といふ、と。また海內經には

有木靑葉紫莖、玄華黃實、名曰建木、百仞無枝、有九欘、下有九枸、其實如麻、其葉如芒

と、卽ち、木があつて靑い葉、紫の莖、赤黑い花、黃色い實をもつてゐる。建木と呼ばれる。百仞の間枝がない。曲りくねつた枝、ぐねぐねした根をもち、その實は麻の實に似、その葉は芒のやうである、といふ。

ここにいろいろと形容される建木の姿が、今問題の木の圖像とどの程度似てゐるかは十分確かめられないが、この傳說的な木の屬性で重要なのは次の點である。卽ち、まづこれが天地の中心にあることである。蒼頡は黃帝の史といはれ、黃帝と關聯づけられてゐるが、黃帝はいふまでもなく五行で中央に配される帝である。一方、この建木のある、天地の中心といはれる所は正午に影がなくなる、といはれるところから知られるやうに、南方といふ概念の限界のところにあると考へられてゐるのである。南にゆくほど正午における日の影が短いといふことは漢代には勿論知られてゐた。[86] 天地の中央でありながら南方にあるから、鏡紋では南に當るところにこれが配されて差支へないのである。『山海經』でも建木は海內南經にも、また海內經にも記される點に、南と中央を兼ねた性格が露呈されてゐるといへよう。

このやうに見てくると、この三段式神仙鏡では上段に天皇大帝、中段には西王母、東王公、下段には蒼頡と神農が向ひ合ふ、といふことになる。ここで疑問が生じよう。卽ち、いくら有名とはいへ、黃帝の史官である蒼頡のやうな者がここに混つてくるのは少少場違ひではないか、と。

蒼頡については齊思和がくはしく論じてゐるので、次に引いておかう。[87]

世本に至つてはじめて沮誦、蒼頡を黃帝の左右史とした……後世の學者は蒼頡の年代について各々推測する所があつた。

『書正義』序の疏にいふ、

其蒼頡則說者不同、故世本云、蒼頡作書、司馬遷、班固、韋誕、宋忠、傅玄皆云、蒼頡黃帝之史官也、崔瑗、曹植、蔡

邕、索請皆直云、古之王也、徐整云、神農黃帝之間、譙周云、在炎帝之世、衞氏云、當在庖犧蒼帝之世、愼到云、在庖犧之前、張揖云、蒼帝爲帝王、生於禪通之紀

と。以上の諸說を綜合してみると、諸家の蒼頡に對する推測は、二つの大派に分けられる。蒼頡を黃帝の史となすものは、世本以下の諸人であり、蒼頡を古の帝王となすものは崔瑗以下の諸人である。大體西漢の人は蒼頡を黃帝の史となし、西漢以後になると蒼頡を古代の帝王とする說が出てくるが、蓋し緯書にもとづくものであらう。思ふに緯書のいふ所も鑿空の說ではない。蒼頡を古の帝王とする說は先秦の古籍には見えないが、『淮南子』の中に記される所はなほ印證に資するに足るものがある。本經訓に

昔者蒼頡作書、天雨粟、鬼夜哭

と、卽ち昔蒼頡が文字を作ると、天は粟を雨ふらし、鬼が夜哭した、といひ、また修務訓に

史皇產而能書

と、卽ち史皇は生れながらに字が書けた、といふが、これによると蒼頡と史皇とは同一人である。故に高誘注に

史皇蒼頡、生而見鳥跡、知著書、故曰史皇、或曰頡皇

と、卽ち史皇蒼頡は生れて鳥の足あとを見、書を書くことを知つた。故に史皇といひ、或ひは頡皇といふ、といふ。これを皇と稱する所からすると、それが上古の帝王であつて黃帝の史でないことは明かである、云云

と。さらに齊思和は『春秋命曆序』に「蒼帝史皇氏」、『春秋元命苞』に「蒼帝史皇氏、名は頡、姓は侯岡」などと出てくることを引いてゐる。今問題の東王公、西王母、天皇大帝と同格に扱はれてゐる蒼頡が、黃帝の史といつた低い身分の者でなく、後漢以後古の帝王の一人と考へられるやうになつた蒼頡であることは疑ひない。沂南の畫像石でも圖26の蒼頡と神農の畫像の下には堯舜禪讓と考へられる畫幅[88]が刻まれ、この畫像石墓の中室を飾る畫像の中で周以前のテーマはこれだけで代表させられてゐるのである。これも古の帝王としての取扱ひである點、鏡の場合と同樣である。

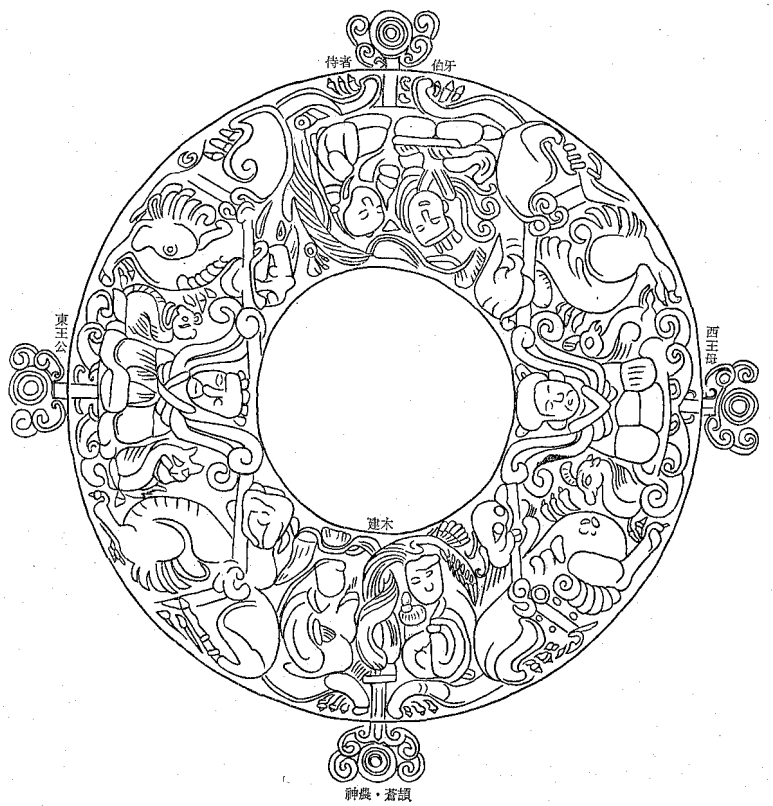


圖28　神獸鏡の內區　熊本縣江田古墳出土　約3/4　東京國立博物館藏

以上のアイデンティフィケイションに誤りがないとすると、三段式神仙鏡の圖柄の表はす所は次のごとくである。卽ち、上段には天の北極周邊の世界が表はされる。現在の北極星に當る天皇大帝が華蓋星の下に坐し、五帝をはじめ世界のあらゆる神靈の最高支配者として君臨してゐる。中段の鈕の左右、卽ち世界の東西の果には西王母と東王公が配される。多くは省略されるが、圖21の例では兩者の下に斜めの線の入つた臺座がある。恐らく昆侖山、大荒中の山といつたやうな、彼等の居る高い山を表はしたものと思はれる。西王母、東王公の世界は人間が羽化して仙人になつた時に到達できる最高の世界、不死の國である。一方下段は建木の生えた大地の中心であり、文化英雄を代表して古代の帝王蒼頡と神農が配される。この配置は天の運行の中心に位置して五帝をはじめとする八百萬の神を支配する最高神、天と地の中間、世界の東西の果にある高山にすむ不死長生の神、降つて大地の中心に配された人間文化の創始者、古帝王、といふやうに垂直的な上中下層の世界の支配者を、平面の上中下の三段に表はし、もつて宇宙全體を表現したものと見ることができよう。

## (3) 若干のヴァリエイション

以上によつて三段式神仙鏡の圖像が何を表はしてゐるかが明かになつた。次にこれを應用して、これと關聯のある他の型式の鏡の圖柄を解明してゆかう。

圖28は江田古墳出土の半圓方格帶神獸鏡の內區である。圖像を上中下三段に分けず、動物像と神像を交互に、外周に向つて放射狀に配してゐる。[89] 鈕の右と左にゐるのは西王母と東王公と思はれる。鈕の下には圖21にあつたのと同樣、幹が縒つた繩狀をなし、兩側に擴がつた波狀の枝に花のついた建木があつて、枝の先は圖21と同樣總狀をなす。その下に居るのは19—21にみたのと同樣な蒼頡と神農である。鈕をへだててこれと對稱の位置にはやはり二人並んだ坐像がみえる。右側にゐるのはその手の姿勢からみて、次の章に記す伯牙で、これに向ふ像は鍾子期である。鍾子期の後には木があり、波狀の枝振りやこれについた花は蒼頡と神農の間にあつた建木と同じであるが、幹は一本である。

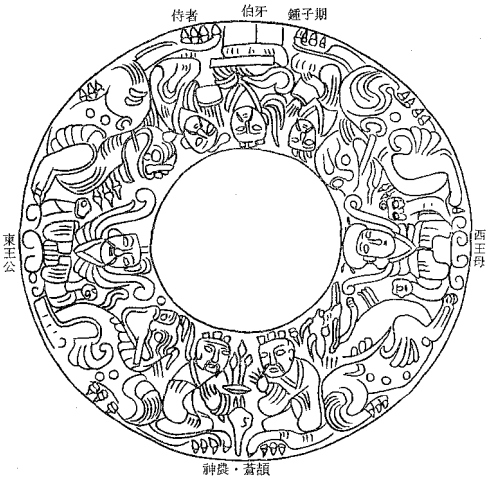


圖29　神獸鏡の內區　江都出土　約3/4

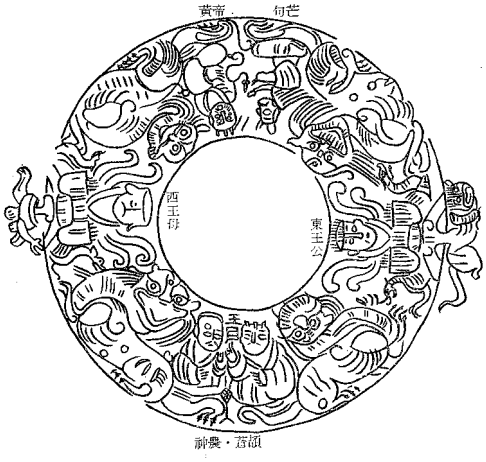


圖30　建安24年銘神獸鏡の內區　約3/4
東京國立博物館藏

圖29は江都彬州鄕の出土。圖28と近い圖像の排列であるが、建木などの樹木が省かれてゐる。鈕の左右は西王母と東王公、下は蒼頡と神農である。兩人の間には、上に三本の穗のやうなものが出た奇妙な植物形が置かれ

てゐることは先に注意した。鈕の上は圖28と同樣、伯牙と鍾子期である。

圖30は建安二十四年銘のある神獸鏡の內區である。ここにも鈕の左右に西王母、東王公を配し、鈕の下には圖28、29と同樣二神が向ひ合ひ、その間に圖29にみたのと相似た植物がみえる。[90] これも蒼頡と神農に違ひない。鈕の上には大ぶりに表はされた主神と、これに向ふ者がゐる。後者は肩に羽があり、頭上には一對の耳があつて羽人の姿である。この羽人は何か草のやうなものを主神に差出してゐる。これが誰を表はしたものかは、これだけでは明かにし難いが、次章の考察の結果から類推すると黃帝と句芒のやうである。

## 四　重列神獸鏡

次に所謂重列神獸鏡の圖柄を檢討してみよう。重列神獸鏡とはいふまでもなく圖31のやうなもので、紀年銘のものも多く、後漢末から三國に多く作られたことが知られてゐる。

### (1)　西王母、東王公、蒼頡、神農

圖32の例をみるに、鈕の左右、外緣沿ひに大きく扱はれてゐるのは勿論白虎(左)と青龍(右)である。その內側、鈕に接して華蓋の下に二神が表はされる。これは西王母、東王公である。その配された位置からさう判斷される。また華蓋の下に表はされた西王母像は樂浪王盱墓出土の永平十二年銘漆案の圖柄[91]によつて古くより知られる所である。

この鏡の圖柄は左が白虎、右が青龍で東西が裏返しになつてゐるが、下右に玄武がをり、上に朱雀と思はれるものが見えるから上が南である。鈕のすぐ上をみると、二人の人物が向ひ合つて手を出して何か會話を交すポーズをとる。左の人物は手に何か草のやうなものを持つてゐる。左右に西王母、東王公、その南に當る所にゐる二人の像といふと、直ちに圖29、30の蒼頡、

神農が思ひ起される。手つき、持ち物からみてこの二人に違ひあるまい。

次に鈕の下をみると、鈕のすぐ下には三分ノ二正面の像とこれに相ひ對する神人が見出される。またそのすぐ下にも坐像とこれに向つて跪拜する羽人像が配される。この二組については後引の資料を檢討した後にその何たるかが判定されることにならう。

圖31　重列神獸鏡　約2/3　箕面，江口治郎氏藏

圖32　重列神獸鏡の內區　約3/4

圖33　重列神獸鏡の內區　約3/4　箕面，江口治郎氏藏

圖34　建安10年銘重列神獸鏡の內區　約3/4
京都大學文學部博物館藏

## (2)　伯牙、鍾子期

次に圖33、34のごとき重列神獸鏡の圖柄を研究してみよう。圖33で鈕の右にゐるのは頭飾が圖32左の像と同樣であるからこれが西王母。鈕を中においてそれに相對するのは東王公といふことになる。鈕のすぐ上に銘をへだてて一對の神像がゐるが、圖32と異なり、蒼頡と神農ではない。西田守夫が詳細に考證したごとく(92)、銘の左、膝の上に盤狀のもの(93)に兩手を置いた像が、

この式の鏡の銘文に記される「伯牙彈琴」を表はしたものであることは疑ひない。

この伯牙の右には、これと同じ姿をしたもう一人の人物が坐り、その右には首を垂れた人物が中心に向つて坐る。伯牙には後引の圖34—37、43などにみるごとく、伯牙と同じ姿の者、ないし首を垂れた者の何れか、または兩者が一緒に表はされるのが常である。これらは誰か。伯牙のつれ合ひといへば直ちに思ひ起されるのが伯牙の音樂の良き理解者、鍾子期である。『呂氏春秋』十四、本味に

伯牙鼓琴、鍾子期聽之、方鼓琴而志在太山、鍾子期曰、善哉乎、鼓琴巍巍乎若太山、小選之間、而志在流水、鍾子期又曰、善哉乎、鼓琴湯湯乎若流水、鍾子期死、伯牙破琴絶絃、終身不復鼓琴、以爲世無足復爲鼓琴者

と、卽ち、伯牙が琴を彈き、鍾子期がきいてゐた。伯牙は彈きながら泰山のことを思つた。すると鍾子期はいつた。すばらしい、琴の彈き方は巍巍として泰山のやうだ、と。少しの間に流水のことを思つた。鍾子期はまたいつた。すばらしい、琴の彈き方は湯湯として流水のやうだ、と。鍾子期が死ぬと伯牙は琴を壞し、弦を切つてしまひ、死ぬまで琴を彈かなかつた。琴を彈いてやるに足る者はもうゐない、と思つたのだ、と。(94)

圖35　重列神獸鏡の內區　約3/4　ボストン美術館藏

鏡の圖像で伯牙と組になつた者の中に鍾子期が居るに違ひないが、どちらがそれであらうか。圖33で伯牙から一人おいて右にゐる人物がそれであらうか。否である。その樂の無二の理解者のためにはこの位置はふさはしくないからである。この鏡の圖でみると、この首を垂れた人物は目を閉ぢてをり、平心にみると居眠つてゐる姿のごとくに思はれる。また圖36の鏡では伯牙が通天冠をつけてゐるのに對し、その側で首を垂れる人物は進賢冠をつけてゐて、身分の相違が示されてゐる。首を垂れる人物は切角の伯牙の琴が理解できずに眠氣をもよほす侍者で、一種の道化役としてそへられたものと解する方がよささうである。[95] さうすると圖33で伯牙の隣に坐し、伯牙と同等なりをした人物の方が鍾子期と考へるべきである。以上、圖33で鈕の上、「君官位」の銘の左右に並ぶ二人と右のうつ向いた一人が伯牙彈琴の群像を構成することが知られた。

神獸鏡の紋樣として伯牙が用ゐられる意味について西田守夫は[96]

> 神獸鏡に於いては、樂が陰陽を調和するという思想に基づいて、伯牙の彈琴が陰陽二神仙、つまり西王母と東王公との調和の役割を荷うようになつたのは、鏡の鑄師が陰陽調和の吉辰として重んじた五月（または正月）丙午の「丙午」ということばに近い名前を伯牙が持つていたからであらう。

と説明してゐる。樂が陰陽を調和するといふ思想の存在は確かであるし、丙午と伯牙の音の近似による觀念の聯合の事實も十分考へられることである。然しそれが故に伯牙の像が東王公と西王母の中間に配置された、とまで説明せねばならないとすると、東王公と西王母の間に置かれる他の圖像、例へばさきの蒼頡、神農についても、同樣な説明を求められることになつて答へに窮することになるのではなからうか。

さうはいつても、筆者は現在のところ西王母、東王公らに混つて、伯牙が特に鏡の圖柄として取り上げられたについて、十分な根據を示すことができるわけではない。然し、伯牙にその資格があることは示すことができる。それは伯牙が單に傳説的な琴の名人たるに留らず、神仙の仲間とみなされてゐたらしい、といふことである。唐の『樂府解題』に伯牙の作といふ仙操なる曲について

伯牙學琴於成連先生、三年不成、至於精神寂寞、情之專一、尙未能也、成連云、吾師房子春、今在東海中、能移人情、乃與伯牙俱往、至蓬萊山留宿、謂伯牙曰、子居習之、吾將迎師、刺船而去、旬時不返、伯牙近望無人、但聞海水洞滑崩折之聲、山林窅冥、群鳥悲號、愴然而歎曰、先生將移我情、乃援琴而歌、曲終成連廻刺船、迎之而還、伯牙遂爲天下妙矣

とある。[98] 卽ち、伯牙は琴を成連先生に學んだが、三年たつても完成しなかつた。精神の寂寞、感情の專一といふ點で不十分だつたのである。成連はいつた。私の先生の房子春はいま東海中にゐるが、人の感情を動かすことができる、と。そこで成連は伯牙と一緒に出かけ、蓬萊山に至つて逗留した。成連は伯牙にいつた、お前はここで練習してゐろ、私は先生を迎へにゆくから、と。船にさをさして行つてしまひ、十日たつても歸つてこない。伯牙はながめ渡すと人氣がなく、聞えるのはただどうどうと寄せては返す波の音ばかり。山林は茫莫とひろがつて群鳥が悲しげに叫ぶ。伯牙はもの悲しくなつて歎じていつた。先生が自分の感情を動かさうとしてゐるのだな、と。そこで琴をとつて歌つた。曲が終ると成連は船にさをさして歸つて來て、伯牙をのせて國にかへつた。その後伯牙は遂に天下の妙手となつた、といふのである。

蓬萊山は勿論東海中にあるとされる傳說的な山で、方丈、瀛洲とともに三神山の一で、仙人の住む所とされる。ここで至妙の域に到達したとされる伯牙も、當然神仙の類と考へられてゐたことが知られるのである。

### (3) 黃帝、句芒

次に圖33の鏡の鈕の下の「君宜官」の銘の左をみると、坐つた像とこれに向ふ人首鳥身の神が見出される。後者の右手、これに接して更にもう一つ人首鳥頸がみえる。同樣な坐像と人首鳥身の神は、圖34の鏡にも同じ位置にある。この方は人首鳥身神の人首の戴く冠に相違がある。卽ち、手前の者は通天冠、向ふの者は進賢冠を着ける。冠の相違は身分の相違を示すから、この二つの首は一つの身に屬し、比翼鳥のやうなものを構成したものではなからう。向ふ側の進賢冠の首は、手前の人首鳥身の神とは別の、これと同じやうな鳥身をもつた從者で、その胴は手前の者の向ふ側に重なつてゐると考へた方がよからう。

圖36　神獸鏡の內區　約3/4

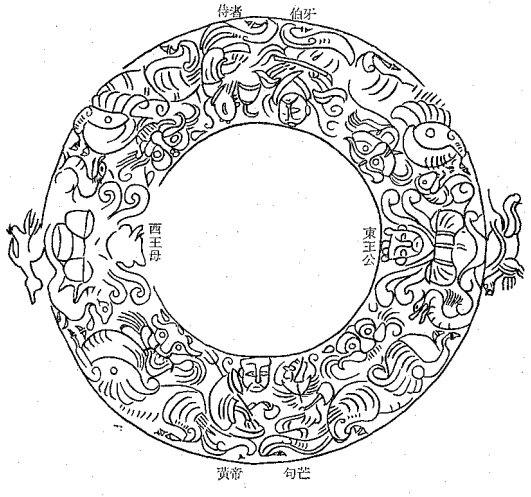


圖37　神獸鏡の內區　約3/4　東京國立博物館藏



圖33にみたごとき、鈕を中心に伯牙彈琴及び人首鳥身の神とその對手を對稱の位置に表はす配置は、圖36にもみられる。[99] 圖33、34と異なり、人首鳥身神は通天冠をつけた方だけの單身像である。これが向ふ坐像の方は肩に三叉のやすのやうなものをかつぎ、左手をひねつてその下端を保持してゐる。鈕の左右に配される神像は、頭飾りからみて西王母、東王公と思はれる。

圖37の鏡も圖36とよく似た圖柄である。鈕の左右にはやはり冠からみて西王母、東王公と知られる神像を配してゐる。鈕の上には伯牙彈琴像。鈕の下には圖36と同樣三叉のやすのやうなものを肩にした坐像がみえる。これを保持する左手の手つきもさきのものと同樣である。これに對する像は圖36で人首鳥身像だつたのが、ここでは人間形の像になつてゐる。

圖33、34、36に認められた、伯牙彈琴と對稱の位置を占める、この人首鳥身の神を伴ふ圖柄は何を表はしたものであらうか。人首鳥身の神として直ちに思ひ起されるのは句芒である。『墨子』明鬼篇、下に

昔者秦穆公當晝日中處乎廟、有神入門而左、鳥身、素服三絶、面狀正方、秦穆公見之、乃恐懼犇、神曰無懼、帝享女明德、使予賜女壽十年有九、使若國家蕃昌、子孫茂毋失秦、穆公再拜稽首曰、敢問神名、曰予爲句芒

と、卽ち、昔秦の穆公が晝間廟にゐると、神が入口を入つて左に曲つてきた。鳥身で黑の緣をつけた白い衣服を着け、顏の形は正方形であつた。秦の穆公は恐れをののいて逃げ出した。神はいつた、恐れることはない。帝は汝の立派な德をよみし、自分をして汝に壽十九年を下賜させ、汝の國家が蕃昌し、汝の子孫が繁殖して秦國を失ふことをなからしめようといふのだ、と。穆公は再拜稽首していつた、あなたの名をうかがひたいのですが。神はいつた、自分は句芒だ、と。楊寬はこの話、それに『呂氏春秋』十二紀で句芒が春に配當されてゐることなどを引き、句芒は春の神で生長を司る者だから壽を下賜し、國家を繁昌させ、子孫をふやすことができるのだ、といつてゐる。句芒が鳥身人面で帝の命によつて人間に壽を授ける使者をつとめると考へられてゐたことが知られる。然らば、問題の鏡の圖柄は句芒が帝の許で人間の壽命の延長に關する相談を受け、ないしは指圖を受ける所、或ひは使命を終つて報告を行つてゐる所と考へることができよう。圖33、34のごとき所謂建安式重列神獸鏡には「周刻容像、五帝天皇、伯牙彈琴、黃帝除凶……」の銘があるから、「伯牙彈琴」と共に「五帝」「黃帝」などの「帝」の圖像があることが當然豫想されるのである。ここに句芒と向ひ合ふ像を、句芒に命令を下す帝と考へることは大いに蓋然性のあることと考へられる。

これが帝とすると、それでは銘文の「五帝」の誰かであらうか、それとも銘文中に五帝の中から特にとりあげられてゐる「黃帝」であらうか。それについては圖36、37で「帝」が持つ柄の短いやすのやうなものが手がかりを與へてくれるはずである。少くとも、同時代の人にとつては、この器物を肩にしてゐる姿をみれば、それが誰であるか直ちに知られたはずである。然し現在のところ帝の持ちものとしてそのやうなものがあつたかどうか、適當な文獻資料を見出すことができない。若干の手がかりは次の事實であらう。卽ち、後漢の張角が黃老に奉事して九節杖といふものを持つて治病を行つたとか、呉の道士の干吉が仙人鏵といふ小型のスコップの類をもつて治病を行つたといふ話である。張角が奉事した「黃老」は黃帝と老子であらうか、或ひは後漢時代に黃老君を祭つて長生の福を求めたといふ話がある「黃老君」といつたものと關係があらうか。兎も角かう考へられよう。卽ち、問題の鏡の圖像の「帝」は人間の壽命の增益の命令を傳達する神である句芒と相ひ對し、小型のやす

のやうな器具を肩にしてをり、また同時代に「黃老君」に仕へて長生を祈る風が知られ、その神に奉事して治病を行ふ一種の神官が小形の杖の類を持つてゐたといふ記錄がある。するとこの鏡の「帝」を黃帝とみればうまく解決がつくのではなからうか、と。つまり生命の增益を司る帝である黃帝の持物は、この三叉のやすのやうなものであつた。これを肩にした姿で黃帝は句芒に人間の壽命の延長の命を傳へる。黃帝はそのため「黃老君」として長生の祈願の對象となつた。またこれに奉事して治病を行ふ道士は黃帝と同樣な象徵的な杖をもつて治療を行つたのだ、と。勿論これは假設である。問題の圖像に榜題のついた資料でも現れればその當否が決定されるであらう。今のところは右のやうに見て考察を進めてゆくことにする。

### (4) 天皇大帝、南極老人

以上の考察により、重列式神獸鏡の圖像配置の型として鈕の左右に西王母、東王公を、上下の一方に伯牙と鍾子期、侍者ないしその一方を、もう一方に黃帝と句芒を配するものがあることが知られた。そこで前に引いた圖32にもどつてみよう。この鏡の蒼頡、神農を伯牙、鍾子期と入れかへてみると、今の型が現れることになる。さう思つてみると、鈕の下の三分ノ二正面の坐像と、これに向ふ眞横から表はされて羽人の一組は、圖37にみた黃帝と句芒と同じ型である。これも同じく黃帝と句芒を表はしたものに違ひない。さうするとその下の坐像は誰か。この像はよくみると右にゐる玄武の蛇の尾の上に坐つてをり、北極と密接な關係のある神であることが示されてゐる。前章を記した三段式神仙鏡においては玄武の上に立つた華蓋のわきに天皇大帝が表はされてゐた。ここには華蓋はないが、北方の神玄武のわきに坐つた神といへば、類推によつてやはり天皇大帝と考へることができよう。[104] 同樣にして、圖33、34において黃帝、句芒の下に居り、玄武をわきにした神も同じく天皇大帝に當てられる。

なほ先に決定を保留した圖30の蒼頡、神農の向ひ側に表はされた、羽人と相ひ對する像も、圖32の型に照すと黃帝と句芒ではないかと考へられる。

重列神獸鏡の最下位に配された神が天皇大帝とすると、鈕をへだてて、これと相對する位置、最上部中央を占める神は誰であろうか。天皇大帝は北極そのものではないがその近くにある星、現在の北極星に當る神で、玄武と共に表はされる。最上部の神は鏡の圖柄の上で現在の北極星に當る神と對稱の位置にあるばかりでなく、その表現の上でも兩側に朱雀を飾る座に坐つてをり、傍に朱雀を伴ふ例も多い(圖33、35)ところから、天の北極の神に對する天の南極の神であることは間違ひなからう。中國世界から本當の天の南極が見えるわけはないが、「南極」の星は漢代より記錄がある。『史記』天官書に

狼比地有大星、曰南極老人、老人見、治安、不見、兵起、常以秋分時、候之于南郊[105]

と、卽ち、(シリウスの下にある弧といふ星座の下)地平線に近いところに大星があり、南極老人といふ。老人星が現れれば天下がよく治まり、見えないと戰爭が起る。常に秋分の時に南郊にこれをむかへる、といふのである。[106]この星は龍骨座のカノープスである。[107]これが見えれば國が治まる、といふやうなことがいはれるのは、地平線近くにしか現れないため、見えにくいからである。この星はまた漢代より長壽を司ると信ぜられてゐた。『春秋緯』[108]に

老人星、見則治平、主壽、老人星亡、則君危若世□

と、卽ち、老人星は現れれば天下がよく治る。人の壽命を司る。老人星が見えないと、君は危ふく……、といふのである。

この南極老人は天體として、空に現れる位置が南の水平線に近い點、および南極の名をもつ點からみて、重列神獸鏡において最上部、南極に該當する所に配されてゐる問題の神たるにふさはしい。鏡の圖柄を改めて注意してみると、長いあごひげを垂すもの(圖33、34)、も多く、また長い頰ひげを飜すものもあり(圖35)、「老人」の名で呼ばれるにふさはしい姿に表はされてゐるのである。『史記』天官書、『晉書』天文志などに記されるやうに、南極老人は天下治平の徵であり、長生きと繁昌を主る神と考へられてをり、その性格の上からいつても當然一番目立つ鏡の上部中央に表はされて然るべきものと考へられるのである。

この南極老人は後漢時代に國家によつて養老の行事が行はれる機會にその祭祀が行はれた記錄があり[109]、その後六朝時代を通じて郊のまつりに於て他の星と併せて王朝の祭祀を受けると共に、老人星をまつつた祠や廟があつて特別の祀りが行はれたことが記錄に殘る[110]。

## (5) 五帝

右の解釋に誤りないものとすれば、所謂建安式重列神獸鏡の銘文に「五帝天皇、伯牙彈琴、黃帝除凶」と記されるうち、天皇、伯牙および五帝のうちの黃帝の圖像、さらに銘文にはない南極老人の像が見分けられたことになる。然らばあとの四帝の圖像も見出されるのではないか。圖33から鈕のすぐ上の伯牙の群像、鈕の左右に接する東王公、西王母、鈕の下左の黃帝と句芒、一番下の天皇大帝とその臣を除いてみると、伯牙の並び、一番左の像、西王母、東王公の外側に並ぶ像、黃帝の右の像、の四像が殘る。これらが五帝のうち黃帝を除いた四帝である蓋然性は頗る大である。圖35はかうはうまく引算ができない。圖33に準じて西王母、東王公の左右の像が五帝のうちの二人とすると、同じ通天冠を着けた像は南極老人の右に一人、黃帝の傍らに一人で計四人見附かる。これが黃帝を除いた五帝のうちの四帝とも思はれる。然し黃帝の傍らの一人は圖37にみるごとき、人間形の句芒のやうである。さうするとあと一人は同じ段右端の像であらうか。圖34は大體圖33の圖紋から、鈕の左右の西王母、東王公を除いた形である。然し圖33と異なり、伯牙のわきに鍾子期しか見えないから、五帝でなく四帝しかゐないことになる。

鏡の圖柄は銘文に擧げられてゐるものが總て見出されるといふには全く程遠いことは研究者すべての知るところであり、ここにみたごとく既知の圖像をとり除けた殘りの圖像の數も、必ずしも五帝から既知の黃帝を除けた四帝の數にうまく合ふとは限らないのである。然し右に示したごとき、四帝にあてるべき候補者は同じ姿に表はされ、大體ながら東西南北に間配られてゐるのである。これらが銘文に出てくる五帝であることとは依然として大いにありうることと考へられるのである。

この式の重列神獸鏡に黃帝を含めた五帝がゐるとすると、それはどう數へられた五帝かを一應考察しておく必要があらう。五帝といつても『呂氏春秋』十二紀(『禮記』月令も同じ)に代表されるごとき太皞、炎帝、黃帝、少皞、顓頊を數へるもの、『大戴禮記』五帝德その他に記される黃帝、顓頊、帝嚳、堯、舜を數へるものがよく知られる。[111] 然し今問題の鏡の五帝はこれではあるまい。これらの五帝は歷史的に繼起し、治蹟や創造した文化も異なる帝王で、例へば後漢の武梁祠畫像石にみるごとく、當然その冠服、持物を違へて表はされるべきものである。然しこの鏡の圖像はみな區別のない姿をとつてゐて互に辨別しがたい。また『呂氏春秋』十二紀のシステムでは、句芒は春、東方に配され、太皞と組合されてゐるのであるが、鏡の圖像では黃帝と組になつてゐるのである。鏡の銘文には「五帝天皇」とあり、五帝は天皇、卽ち天皇大帝と並びいはれてゐる。天皇大帝と一緒に並び稱される五帝といへば、北極の周邊、紫微宮の中、華蓋のわきにある五帝座の星座と關聯した五帝である。『周禮』春官、大宗伯の疏に

案、春秋緯運斗樞云、大微宮有五帝座星、卽春秋緯文耀鉤云、春起青受制、其名靈威仰、夏起赤受制、其名赤熛怒、秋起白受制、其名白招拒、冬起黑受制、其名汁光紀、季夏六月火受制、其名含樞紐

とある。ここに引かれる五帝座に配される靈威仰、赤熛怒等の五色に配される帝は、『五行大義』[112] 所引の『河圖』に

東方青帝靈威仰、木帝也、南方赤帝赤熛怒、火帝也、中央黃帝含樞紐、土帝也、西方白帝白招拒、金帝也、北方黑帝汁光紀、水帝也

とあり、青帝、赤帝など五行に當る五色の名で呼ばれることもある。この五帝座の星座にあてられる五色の帝についての說は漢代の緯書に多く現れるもので、[113] 後漢の鄭玄などがこれをもつて經書の注釋を行つてゐることはよく知られる所である。今問題の重列神獸鏡の五帝が、銘文に「天皇」と並び記される點からみても、また互ひに區別のつけにくい姿で表はされてゐる點からみても、傳說の古帝王から拾ひ出された五帝ではなく、この星座にあてられ、五行說の五色に間配られた、いはば觀念的な五帝の方だとみるべきである。

圖38　嘉禾４年銘重列神獸鏡の內區　約3/4

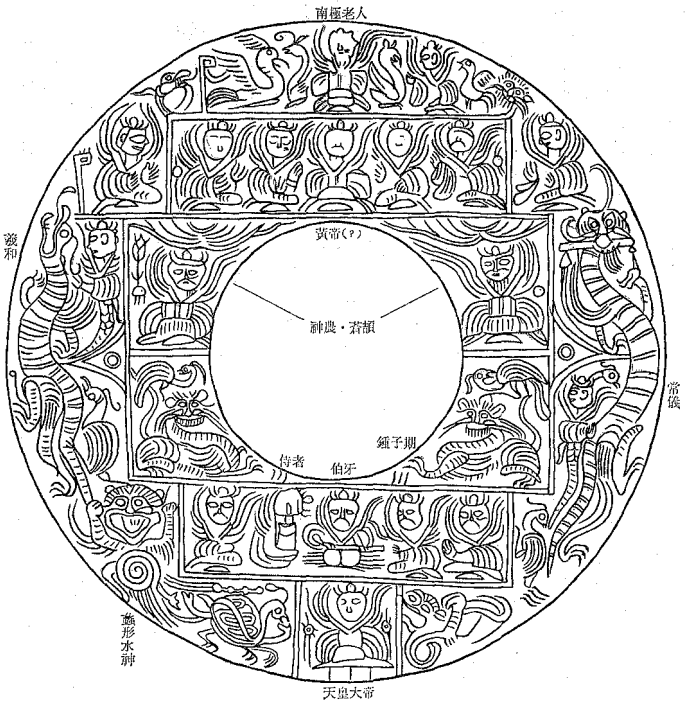


圖39　永安４年銘重列神獸鏡の內區　約3/4
五島美術館藏

## (6)　常儀、羲和、蟲

圖38はさきにみた圖32と相近い圖像の配置になつてゐるが、小異が認められる。卽ち最上は南極老人、その次の段が蒼頡、神農、鈕の左右が羽蓋の下に坐る西王母、東王公、最下段は天皇大帝である點は變りないが、鈕の下の像が圖32では黃帝であるに對し、圖38は膝の上に兩手を出し、琴を彈く伯牙に入れ變つてゐる。

次に圖39の永安四年銘の重列神獸鏡をみてみよう。上に朱雀、左右に青龍、白虎、下に玄武が配される。最上段が南極老人、最下段が天皇大帝、天皇大帝の上が伯牙である點、圖38と共通してゐる。この鏡では伯牙は鍾子期、首を垂れる侍者などを左右に伴つてゐる。その上、鈕の斜め下左右には鳥を伴つた獸がゐる。この一對の獸の上には羽蓋の下に坐る神像がある。よくみると他の同樣な例と異り、この神は西王母、東王公ではない。同じ形の冠をかぶり、どちらも男性と判定されるからである。さうするとこの一對の神は誰か。この二神うち、左の神の左側に、穗のついた麥のやうな植物が表はされてゐる。これはさきに圖21、29、30などで蒼頡と神農の間にあつたものである。さうすると、この左の神は蒼頡ないし神農といふことになる。更に考へるに、鈕の左右に對稱形に羽蓋の下に表はされるのは通常一對をなす西王母と東王公であることを考へ幷せると、この圖39で羽蓋の下に表はされてゐるのも、この式の鏡紋で通常相ひ伴つて表はされる習ひとなつてゐる蒼頡と神農とみて差支へないのではなからうか。さうとすると、ここでも伯牙、鍾子期が蒼頡、神農と鈕をへだてて向ひ合つてゐる點、圖38と同じ型であることが知られるのである。

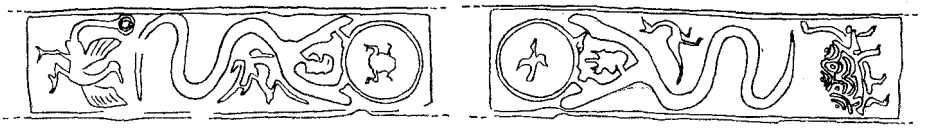

圖40　常儀と羲和　廣漢出土墓塼　約1/5

なほ圖39の鏡で鈕の上、最上部の南極老人の下には、直中の正面形の坐像を中心とし、左右からこれに向ふ侍者四人、合計五人が一並びになつてゐる。これは誰であらうか。これといつた證據はないが、通常伯牙と黃帝は鈕を中心に對稱の位置に配されるから、侍者の盛大さからみても、或ひは黃帝に當てられるかもしれない。

さて、この重列神獸鏡には東西に配された青龍、白虎の脇に人身龍尾の神が見出される。人身龍尾の神といふと、大抵の場合伏犧女媧と解說されるのであるが、この場合はさうではあるまい。その二神は明かに東方と西方に配されてゐるのであるが、伏犧女媧は東西に分離して表はされるべき神でない。圖39の人身龍尾神は、東方のものは尾の下に、西方のものは頭の上に當る所に小さな圓が表はされてゐる。これら

の圓は日と月と思はれる。圖40に引いたのは四川、廣漢城外出土の塼である。烏の圖を入れた太陽と、蟾蜍の圖を入れた月が、人身龍尾の神によつて捧げられてゐる。これらが日月を司る神の像であることは疑ひない。頭飾からみて日を司る神の方が男、月を司る方が女である。日を司る神の下には玄武、月を司る神の下には朱雀がゐる。玄武、朱雀と日神、月神で四方の神がそろふといふ趣向である。圖39の青龍と白虎の側に配された人身龍尾の神が、この塼にみる日を司る神と月を司る神に當ることは疑ひなからう。

これらの日を司る神、月を司る神は何と呼ばれた神であらうか。恐らく羲和と常儀ではないかと考へられる。『呂氏春秋』、勿躬篇に

羲和作占日、尙儀作占月

と、卽ち羲和は占日を創作し、尙儀は占月を創作した、といふ。また『晉書』、律曆志、中に、

軒轅……使羲和占日、常儀占月、車區占星氣

と、卽ち軒轅氏（黃帝）は羲和に日を占はせ、常儀に月を占はせ、車區に星と氣を占はせた、といふのである。羲和と常儀が一組で夫々日と月を專問に扱ふと考へられた所から生れた話と考へられる。

『楚辭』離騷に「日忽忽其將暮、吾令羲和弭節兮……」と出てくる羲和を王逸が

羲和日御也

と、卽ち太陽の乘つた馬車の御者だ、といひ、また揚雄の河東賦に[114]

羲和司日

と、卽ち羲和が日を司る、ともいはれることはよく知られる所である。[115] また常羲（常儀）が十二月を生んだ傳說が『山海經』大荒西經にみえ、『淮南子』覽冥訓に羿が不死の藥を西王母に乞ひ、恆娥（本によつて常娥とも書かれる、卽ち常儀）[116] がこれを盜んで月に逃げて行つた話は有名である。[117] さきの鏡や塼の圖像で月と日を捧持する人身龍尾の神を、これら傳說上太陽及び月の面倒を

みる役割を振り當てられた羲和と常儀に當てることは正當と考へられよう。

圖39の神獸鏡の青龍の下には大きな頭をもち、胴に渦卷のついた珍しい動物が表はされてゐる。圖41は南陽百里奚村出土の方格規矩鏡の周緣の紋樣の一部で、これも龍のすぐ後に表はされてゐる。この方をみると、これは明かに卷貝の殼をもつた怪物である。殼の形に長短の差はあるが、圖39の動物の胴に渦卷が表はされてゐるのも、同樣卷貝の殼ではないかと考へられる。同樣な、腹に渦卷の貝殼のついた怪物は建安式重列神獸鏡で天皇大帝のわきに多くみる所である(圖33—35)。兩手をさし上げるポーズも共通する。これらでは圖33、34に見るごとく、片足を殼にかけるものが多い。

卷貝から顏を出す神には次のやうな話がある。卽ち『風俗通』に

公輸般見水上蠡、謂之曰、開汝形、蠡適出頭、般以足畫圖之、蠡引閉其戶、終不可得開

と、卽ち公輸般[118]は水のほとりにゐる蠡を見つけた。これに汝の形を開け、といふと蠡は丁度頭を出した。般は氣づかれないやうに足でもつてその姿を寫生した。蠡はふたを引いて閉ぢ、その後はたうたう開かせることができなかつた、といふのである。

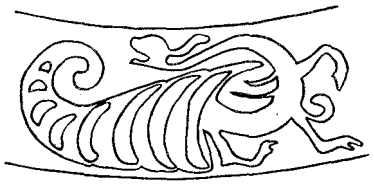

圖41　方格規矩四神鏡の蠡形水神
長沙出土　約1/1

この話に出てくる蠡はたにしの類である。蠡について『說文』蚰部に「蠡は虫が木の中をかぢることだ」と解してゐるが、この場合勿論このやうな動詞ではない。段玉裁は『說文』虫部に「蝸は蠃である」といふのについて、これがたにしの類のことであることを解說し、經籍に蠃の代りに假借字として蠡の字が使はれることに注意してゐる。その通りである。[119]鏡に出てくる卷貝の殼をもつた神は、天地を支配する神神に仲間入りしてゐる。さうするとかなりよく知られた大物の水神であつたやうである。當時における名前や屬性については後考に俟ちたい。

圖42は天紀二年銘の變つた圖柄の鏡であるが、今まで見てきたのと關係のある圖像が出てくるので

圖42　天紀2年銘重列神獸鏡の內區　約3/4

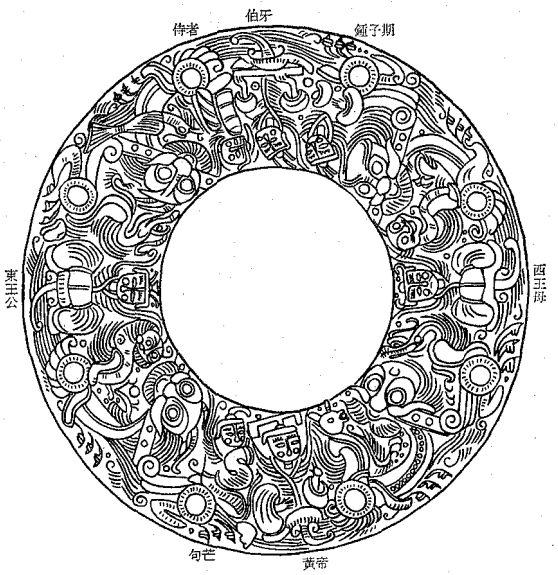


圖43　永康元年銘半圓方格帶神獸鏡の內區　約3/4
上海博物館藏

引いた。圖39と同樣、左と右の外緣沿ひに大きく白虎、青龍が扱はれる。龍と虎の頭の斜め後には夫々三足の烏と蟾蜍を入れた光芒のある圓盤がある。勿論日月である。その下には正面向の羽人が兩手でこれをさし上げ、蹲居してゐる。これも日月を司る神と思はれるが、圖39のものとは異なつた姿をとる。羲和と常儀の變形であらうか。この日月を司る神の位置も圖39のものに對應するものである。

鈕の眞上には長い鬚を生やした男が跪き、その後に曲柄の蓋と小人物像が表はされてゐる。青龍と白虎の位置が實際の方向通りと假定してみると、上が北である。さうすると、鬚を伸した男の姿勢が腑に落ちないが、これらは北極附近の華蓋、天皇大帝を表はすとみられる。鈕の斜め下左右には向ひ合つて二神が坐り、兩人の中間、鈕の眞下にはアーチ狀の木がある。圖44の李翕碑のものと比べると、やはり木連理の一種とみられよう。[120] 南方に配された木とこれを挾む二神といふと圖19—21の建木と蒼頡、神農が思ひ起される。圖19—21の建木は幹が二木の縒り合さつた形になつてゐる。これも木連理の表現法の一つとみられるから、兩者のテーマの共通性は更に强まるわけである。

他に、圖42の鏡の圖柄には十分明かでない圖像が幾つかある。眞上に大きく扱はれた鳳凰、連理樹の枝の下にしやがむ人物、木の左右の龜と龍、白虎と青龍の尾の下にあるもの、など。他に蒼頡と神農の侍者の上にある圓は星とみられよう。これらについては、いづれも何かの傳說ないし信仰の裏づけがあつたに違ひないが、今のところ明かにし難い。

神獸鏡の類には神像及び獸の配置に多くのヴァリエイションがあり[121]、すべての神像についてそれが何といふ帝、何といふ名の傳說上の人物とアイデンティファイできるといふには程遠いが、例へば圖43の永康三年銘の環狀乳神獸鏡の內區の紋樣などは、以上の研究によつて得た知識の應用問題として容易に說明されよう。卽ち、鈕の左右に東王公と西王母、上には伯牙、鍾子期と侍者がみえる。鈕の下、伯牙と相ひ對する位置に冕をつけた坐像及びその侍者が表はされてゐる。馬承源はこれを建安式重列神獸鏡の銘に出てくる「黃帝除凶」にあてた[122]。馬氏は漢鏡の銘にこの句が出てくるから、といふ以外に證據をあげてゐないのであるが、その勘は當つてゐる。さきに記したごとく、圖33—37などで「伯牙彈琴」と對稱の位置にある像は多く黃帝と考へられるからである。問題の像が他の神、例へば天皇大帝である可能性も考慮に入れなければならないが、他の型式の鏡の圖像配置の型からの類推で、この場合も黃帝である蓋然性が大きい、といふことである。

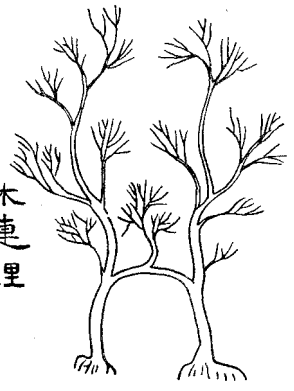

圖44　李翕碑の木連理　約1/8

以上この章で研究して來た重列神獸鏡について考察してみるに、二、三章でみたのとはまた違つた宇宙像の表現型式がみられる。第三章で扱つた鏡背紋の神像の配置が天上から地上へと上下に重層式になつてゐたのと異なり、この章で研究したものでは神像は天から地へと求心的な配置になつてゐる、といふことができる。重列神獸鏡では上下とも外緣に接して南極老人と天皇大帝が押へ、ここはいふまでもなく天の南極と北極に當る。鈕の左右、外側には大きく青龍と白虎が表はされる。第二章で記したごとく、これらは天の東西の星宿の代表で、これも天上、星の世界である。その內側、

鈕の左右には西王母と東王公が居て、これは天と地の中間、崑崙のやうな高山の神である。鈕からこれらと等距離である點、第三章で扱つた型式のごとく儼密ではないが、鈕の上下には地上に屬する神の像—蒼頡と神農、伯牙と鍾子期、黃帝と句芒といつた傳說的帝王乃至神仙の仲間が配されてゐる、といふわけである。

圖28—30、36、37、43に引いたやうな、鈕の周圍に神像を一かは並べにした類はどういふことになるか。重列神獸鏡と対照してみるとわかるやうに、この類は重列神獸鏡から東西南北に當る天上の世界に屬する神神——南極老人、天皇大帝、青龍、白虎——をとり除いて、いはばより身近な神だけを殘したものなのである。兩者の違ひはかう解釋されよう。卽ち、重列神獸鏡では遙か彼方、到底到達できない星の世界から地の果、天と地の中繼地に當る崑崙の世界、それに地上に昔ゐたとされる傳說的帝王まで、といふやうな距離が、神像を層狀に配置することによつて表現される必要があつたのに對し、この類では後二者——西王母と東王公、傳說の帝王や神仙の仲間——は等しく地に屬し、同じレベルといふことも可能であり、從つて鈕の周圍に一かは並べにして放射狀にして表現された、と理解することができるのである。

## 五　結　び

以上、三つの章にわたつて漢を中心とする時代の鏡紋若干をとり上げ、まづそこに畫かれてゐる圖柄が何であるかを明かにし、ついでそれらの配置の意味する所を考察した。卽ち第二章においては方格規矩四神鏡の圖柄は方形の大地の四方の果に立つた梁と柱によつて蓋狀の天が支へられ、この天の四方に配された星座の精に瑞獸が現れるといふ一種の祥瑞圖であることを明かにした。また第三、第四章においては三段式神仙鏡、重列神獸鏡の圖紋が天の北極に居る最高神、ないしはこれと對置された南極の神など星の世界に住む神の下に、天地の中間に位する高山の神、ついで地上の文化英雄や神仙たちが、この順に重層的ないしは求心的配置をもつて表はされたものであることを明かにした。從來殆んどアイデンティファイされることなかっ

た鏡背紋の圖像にみる神神の姿は、夫々それだけとして大いに興味深いものであるが、それらが何の神であるかが明かになつた結果自ら浮び上つた漢から三國時代の人人の世界像――天地およびそこに一定の秩序に從つて點綴されて天體の運行から地上の人間の運命を支配する諸諸の神についての綜合的な表象は、從來全く知られてゐなかつただけに更に貴重なものといへよう。これら鏡背に階層づけて表はされた諸神の中には、後の文獻に秩序立つて記される道教の神神と共通のものが幾柱も認められる。關係資料の少い後漢―三國時代に關し、この方面の研究に有力な材料を加へるものと信ずるが、專門でないので今は立ち入つて論ずることはしない。

最後に、研究を進めるに當つて當研究所の漢代文物の研究班の班員の方方に貴重な助言を幾つかいただき、また特に鏡については樋口隆康氏に、天文關係については橋本敬造氏に多くの教示を受けた。記して感謝の意を表したい。

注

(1) 中國科學院考古研究所一九五九、一六〇頁
(2) 中山一九一八、㈡、㈢、一八九―一九六頁、㈦
(3) 後藤一九二六、九三―六頁
(4) 鈴木一九六九、二頁
(5) Yetts 1939, pp. 148–165.
(6) 劉復一九三二、五九五―六〇五頁
(7) Cammann 1948, p. 160.
(8) 平山一九一八、㈦、四七〇―四八一頁
(9) Kaplan 1937.
(10) カプランは畫像石に畫かれた六博の盤（圖6のごとき）を六博に使ふものとアイデンティファイできないまま論じてゐる（Kaplan 1937 pp. 22–3）。
(11) Yang 1947, 1952, 水野一九四七、勞一九六四
(12) Yang 1947, p. 203.
(13) 中國科學院考古研究所一九六三、三七―八頁、圖版一三、16、17
(14) 例へば駒井一九五三、一一九頁、第一九圖のごとく。
(15) 駒井一九五三、一二一頁
(16) 勞一九六四、二五―六頁、附圖五
なほ漢代には所謂方格規矩鏡や六博の局のほかに天地の方圓を象ったものとして式天地盤がある。平壤の王盱墓出土の木製品で、方板の上に中心軸を同じくして圓盤が重ねられ、夫々に二十八宿、十二支で指された方角、八卦、十二月神等等が書きこまれ、その上で天綱といふものを廻して占ひをするものである（原田、田澤一九三〇、六〇―一頁、圖版一一二）。また王振鐸一九四八、二一一―八頁）。方圓の上に方角、星宿が記入されてゐることから、これも宇宙を象るものと知られるが、ここにはTLVの形は見出されない。さきの方格規矩の圖式とはまた違った學派に屬さるものと考へられる。
(17) Cammann 1948.
(18) カンマンは方格の四邊の中央にT字形の出る形で地を象ることは、唐代に降る曼陀羅の中には方形の四邊から出たT字形に夫々「東

方」、「南方」、「西方」、「北方」と記入したものがあって（Stein 1921, p. 975, ch. 00190、松本一九三七、圖版一六一aがそれ）、これが四つの方角を示すものであることが知られることに注意してゐる（Camman 1949, p. 163）カンマンがこのT字形を門とみたのは、時代の降るラマ教の曼陀羅で、方形の四面にT字形が出、その外側に本當の門を畫いたものがあり、またT字形の部分が「地の門」と呼ばれる（Camman 1948. Fig. 2, Camman 1950, p. 110）ことよりの類推と思はれるが、漢の鏡背紋と八世紀以後のラマ教の曼陀羅にとり入れられた方格とTの組合せの圖式とでは、時代も宗教的背景も懸隔が大きすぎよう。

(19) カンマンの引く銘はやや特殊なヴァリエイションである。ごく普通にみるこのこの句を引いた方がよい。

(20) Camman 1948, pp. 166–7.

(21) 駒井一九五三、一〇七頁

(22) Bulling 1955, p. 33 以下

(23) 中山一九一八、二〇八—九頁

(24) 方形の地を「矩」といふが、矩形でなく正方形である。『呂氏春秋』有始覽に「凡四極之內、東西五億有九萬七千里、南北亦五億有九萬七千里」といふ。東西、南北等距離である。

(25) 高誘注に「圓、天也。方、地也。表、正也。繩、直也」と。

(26) 同じ話は『淮南子』覽冥訓に出てくる。

往古之時、四極廢、九州裂、天不兼覆、地不周載……於是女媧、鍊五色石、以補蒼天、斷鼇足、以立四極

とあり、何故四極がつぶれたかについての話がない。また共工が不周山を角で突いた話は『淮南子』原道訓にあり、

昔共工之力、觸不周之山、使地東南傾、與高辛爭爲帝、遂潛于淵、宗族殘滅、繼嗣絕祀

とあり、爭つた對手は顓頊でなく高辛となつてゐる。

(27) 前注引『淮南子』原道訓の條の高誘注。また天文訓の「閶闔風至四十五日、不周風至」の注に「乾卦之風也」といふ。不周風は乾の方角、卽ち西北から吹いてくる風である

(28) 『說文』に「極、棟也」と。また『漢書』天文志「後流星下燕萬載宮極、東去」の注に「李奇曰、極、屋梁也、三輔閒名爲極、或曰、極、棟也……」と。

(29) このやうに地上に垂直に立つものを外に向つて倒した形に畫く畫法は、例へば漢代の四川省の畫像塼に中庭を圍ふ塀を畫く際用ゐられてゐる（重慶市博物館一九五七、図版七）。

(30) 例へば鈴木一九六九、圖版三三

(31) 高誘注「繩、直也」。

(32) 同、「……四角爲維也」。

(33) 『周髀算經』下

(34) 劉復も（一九三二、九五二—四頁）前引日時計の四方のV字形をこの天文訓の「鉤」にあてゐるが、その命名の由來については天文の測量道具をくくりつけた圖表の類の四方に鉤（かぎ）がついてゐたからかもしれないと憶測してゐる。

(35) Stein 1928, p. 663 後六六七年及び六八九年の紀年のある墓誌塼が出土した。

(36) 新疆省維吾爾自治區博物館一九六〇、圖三、一七頁

(37) 林一九六六、二四—六頁

(38) 龜と蛇が絡んでゐるのは、漢代に龜に雄がなく、蛇をその雄とする、といふ考へがあつた所から、龜の雌雄が絡み會ふ姿がかう表はされたと知られる。『說文』に「龜、舊也、外骨內肉者也、天地之性、廣肩無雄、龜鼈之類以它爲雄」といふごとくである。駒井和愛が（駒井一九五三、一〇三頁）かういふ說は玄武の圖から思ひつかれた說明に他ならない、といふが、さういふ考へがあつたから玄武の圖が作られた、と考へるべきである。

(39) 鈴木一九六九、二—三頁

(40) Yetts 1930, p. 73–4 カールグレンは（Karlgren 1934, p. 26）これ

に對し、漢代に今みる形に編纂されたとはいへ、注(57)に引く『禮記』曲禮の記事は確かに周代に遡るといふ。然し根據を示してゐない。

(41) 今の木星のこと。
(42) 今の火星のこと。
(43) 今の土星のこと。
(44) 今の金星のこと。
(45) 今の水星のこと。
(46) 『史記』、『史記』によつた『漢書』とも現行本ではここに「中官」、「東官」等として引いた「官」の字をみな「宮」に作つてゐる。錢大昕は『廿二史攷異』の史記、三、天官書のところに「宮」は「官」に作るべし、として證據をあげてゐる、それによると、唐の司馬貞が『索隱』を作つた時のテキストがさうなつてゐたことは確かである。『晉書』天文志に「中宮」があり、それについては誰も「中官」でなければいけないといふことは考へてゐない。史記がもともと錢大昕のいふやふに「官」に作つてゐたかどうか、問題がないわけでないと思はれるが、ここは通說に從つておく。
(47) 安田、近藤一九七一、四七二頁以下の譯による。
(48) 今の『漢書』天文志には「柳爲鳥喙」とある。
(49) 安田、近藤一九七一、四六六—七頁星圖
(50) 同右
(51) 『漢書』天文志には「張嗉」に作る。
(52) 注(49)に同じ。
(53) 同右
(54) 同右
(55) 宋の刑昺は『爾雅』釋天「析木之津」の疏に、東西南北各七宿が全體で夫々龍、虎、鳥、龜の形をなすと解說してゐるが、後世の新しい考へ方である。
(56) 駒井一九五三、九六頁

(57) 四神の確立期についての右の考へに大過がないとすると、次の事實は興味深い。卽ち、禮の古典に四神の證としてよく引かれる記載は、すべて前漢中頃以後のものと違ひがあるといふことである。『禮記』、禮運に

何謂四靈、麟鳳龜龍謂之四靈

といふが、白虎の代りに麟が入つてゐる點で相違がある。また『禮記』、曲禮、上に

行前朱雀而後玄武、左青龍而右白虎、招搖在上、急繕其怒

とある。鄭玄の注(以此四獸爲軍陳、象天也、急猶堅也、繕、讀曰勁、又畫招搖星於旌旗上、以起居堅勁、軍之威怒、象天帝也、招搖星在北斗杓端、主指者)によると、これはかういふことである。天子が軍陣をたてて進むには、前後左右に夫々朱雀玄武青龍白虎を象つた陣形の軍を配し、招搖といふ北斗の柄の端の近くにある小さな星を畫いた旗をたてる。この軍の威容は堅固で强く、天帝の怒つたやうな勢である、と。

ここでも前後左右の四神は後世の方式通りであるが、天に當るものが招搖といふ星とされる點、不備である(吉田一九七二、六一頁)。

『周禮』考工記、輪人に

龍旂九斿、以象大火也、鳥旟七斿、以象鶉火也、熊旌六斿、以象伐也、龜旐(孫詒讓『周禮正義』により「蛇」を「旐」に正す)四斿、以象營室也、弧旌枉矢、以象弧也

といふ。龍旂について鄭玄の注に

交龍爲旂、諸侯之所建也、大火、蒼龍宿之心、其屬有尾、尾九星

と。前半は『周禮』、春官、典路の記載によるもの。後半は、本文に大火を象るといふ大火は二十八宿の中の東方の宿に屬する「心」宿で、その屬に「尾」がある、といふのである。これは前記のごとく春秋以來漢に及ぶ通說の通りである。鳥旟については鄭玄は

鳥隼爲旟、州里之所建、鶉火、朱鳥宿之柳、其屬有星、星七星と。前半は典路の記載による。後半は本文に鶉火を象るといふ鶉火は二十八宿中の南方の宿にある「柳」に當る。その屬に「星」といふ星宿があり、その星の數は七つある、といふのである。これも天官書に柳を朱鳥の嘴に、七星をその頸にあてるのと合ふ。次の熊旗について鄭玄は

熊虎爲旗、師都之所建、伐屬白虎宿、與參連體六星

と。前半は典路によるもの。後半は本文に伐を象る、といふ伐は二十八宿中の西方の宿に屬し、「參」と連なり、「參」の三つの星と合計して六つの星がある、といふ説明である。伐は二十八宿の一ではないが、鄭玄はその一つである「參」、卽ちオリオンの三つ星と連なつてゐて、合計すると星數が六つになつて「六旂」といふのと合ふと説明してゐるのである。天官書は「參」を白虎に當ててゐたが、ここには熊虎を畫いた旗が「參」でなく「伐」を象るといふ點、僅かながらづれがある。龜蛇について鄭玄は

龜蛇爲旐、縣鄙之所建、營室玄武宿、與東壁連體而四星

と。前半は典路によるもの。後半は、本文に營室を象る、といふ營室は二十八宿中の北方の宿に屬し、東壁と連なつて星の數は四つである、といふ解説である。營室はペガサスの$\alpha$、$\beta$、東壁はアンドロメダの$\alpha$とペガサスの$\gamma$である。これも天官書の『索隱』、『正義』の解釋が正しいとすれば、そこに玄武が「虛」「危」に當てられてゐるのと相違がある。

最後の弧旌枉矢の説明は、以上の四種の旗をピンとさせるための芯についてのことで、弧といふ星はシリウスの東南にある星座である。これは方角とは關係がないので解説は略する（林一九五九、三〇八頁參照）。禮書と天官書以後の説との相違は以上のやうなことである。

長廣一九三三、一三六—九に注意されてゐる。然し美學的考察の對象とされ、その意味する所については觸れられてゐない。





(59) 鈴木一九六九、三頁

(60) 熊—南、圖17上、西、同圖、中、下、北、梁一九四〇—二、二、中、三九。羊—東、鈴木一九六九、三〇、南、同、二四、西、同四三、北、文物、一九五七、八、三六頁、鳥—南、鈴木一九六九、二七、西、考古、一九六四、九、四七八頁、北、梁一九四〇—二、二、中、二六

(61) 『宋書』、符瑞志

(62) 同右

(63) 『漢書』王莽傳、上に「武功長孟通、浚井得白石、上圜下方、有丹書著石、文曰、告安漢公莽、爲皇帝、符命之起、自此始矣」とある。王莽が皇帝にならう、と記された奇蹟の白石が上圓下方であつたといふのは興味深い。文字通り上が圓で下が四角いといふやうな石では文字が書きにくからうから、この上圓下方は外圓內方の意味にとつた方がよい（上圓下方のこの意味については王世仁一九六三、五〇四頁參照）。圓內に方格のある石に符が書かれたとすると、今問題の方格規矩四神鏡に四神の瑞が表はされたのと同じ趣向である。どちらも王莽前後の時代の風潮の反影といへよう。

(64) 鈴木一九六九、二四

(65) 「衞」に作るものもある（梅原一九二四、一四）。

(66) 「旁」に作るものもある（羅一九二九、九b）

(67) 鈴木一九六九、一

(68) Karlgren 1934, p. 49 の譯による。

(69) 鈴木一九六九、二五

(70) 樋口隆康氏の用語による。

(71) 「鷹鷂……」の條

(72) 現在の天の北極は北極星の近くにあるが、北極は年と共に移動するもので、晉代の北極は大體 Camelopardis $\Sigma$ 1694 のあたりにあつた（安田、近藤一九七一、四六八頁圖）

(73) 實際は小範圍でぐるぐる廻る。ただ大きな圓は畫かないといふこと

で、紐星のやうに全く廻らないわけではない。

(74) Ho Peng Yoke 1966 は盧文弨『晋書天文志校正』、吳士鑑、劉承幹『晋書斠注』の説により、本文の「九星」は七星とするがよいとする。

(75) 和刻本に「設敍は帝の居る所に順ふ」と讀むのに從ふ。Ho Peng Yoke 1966 に五帝で句讀を切るのは誤り。なほ以下まだ紫宮の中の星座の記述がつづくが省略する。

(76) ホー氏の星座圖に記入されてゐる星を Norton 1964, Map I. II に落して製圖したもの。從つてこれは晋時代に諸星座がこの位置に、この通りの形にあつたといふ復原圖ではない。

(77) 上田一九三〇、一二九頁。

(78) 上田一九三〇、卷末轉載のものによる

(79) 注(77)に同じ。

(80) Schlegel 1875, pp. 526, 533-4, 91. I.

(81) 『五行大義』第二十、論諸神「甘公星經云、天皇太帝秉萬神圖、一星在句陳中、名燿魄寶、五帝之尊祖也」

(82) 九魚、書および沮の條

(83) 聞一九五五、圖四三解説

(84) 小南一郎氏の教示を受けた。

(85) 右側の二人の像のうち一人は神農としても、もう一人は誰であらうか、今の資料では決めにくい。

(86) 『周禮』大司徒に「以土圭之灋測土深、正景以丈地中、日南則景短多暑……」と、卽ち、土圭の法によつてその土地の南北の位置を測定する。日の影が土圭とぴつたり同じ長さになるのを確認して地中を決定する。この地中よりも南の土地では影は短くて暑氣がまさり……(安田、近藤一九七一、五五五頁の譯)といふごとくである。

(87) 齊思和一九三四、三九九—四〇〇

(88) 曾等一九五六、三九頁

(89) 神像の間に入つてくる動物像の意味するところについては今のところ成案をもたない。後考に俟つことにする。

(90) 兩人の顏の間に文字が記されてゐるが何と讀むべきか明かでない。

(91) 原田、田澤一九三〇、圖版五七、五八、四二頁

(92) 西田一九六八

(93) この盤狀のものの兩側から上反りの羽毛狀のものが出てゐる。これが何であるかは今のところ明かにし難い。

(94) 相ひ似た話は『列子』湯問にもみえる。

(95) 馬承源は(馬一九六二、五四頁)圖38の例について、伯牙のわきに顏を眞眞に向けた人物も、首を垂れた人物も均しく樂を聽く狀と解してゐるのは贊成できない。

(96) 西田一九六八、一八—二一

(97) 『事類賦』樂部所引には「延」に作る。

(98) これは『太平御覽』五七八所引による。『說郛』弓第百にのせられるものは字句が省略されて話が短くなつてゐる。年代上もつと遡る蔡邕『琴操』上(『平津館叢書』十集)にもこの話がのせられてゐるが後半が闕けをり、孫星衍は『事類賦』樂部注に引く『樂府解題』によつて闕けた後半を補つてゐる。これも『太平御覽』より字句が省略されてゐる。

(99) 圖36では伯牙の兩手の上を細い棒が横切つてゐるが、これは几の横木と思はれる。伯牙は膝に琴を置き、几の下から手をのばして琴を彈いてゐるわけである。

(100) 孫詒讓『墨子閒詁』に「素服三絕」について「三絕無義、疑當作玄純」といふのに從ふ。

(101) 楊一九四一、三八七—九頁

(102) 大淵一九六四、六—七、注(4)

(103) この黃老君といふものがどのやうな性格のものかについては十分わからないらしい(大淵一九六四、四二〇頁、注(12))

(104) 北極近くにゐる偉い神といへば、他に北極第二星にゐるといふ太乙なども考へられるわけであるが(二七頁引『晋書』天文志)、鏡紋

に現われ一群の神神のスタフの共通性から考へて、三段式神仙鏡と同じ天皇大帝である蓋然性は大きいと思はれる。

(105) この狼は衍字。『史記會注考證』參照。

(106) よく似た記事は『晉書』天文志にも記されてゐる。

(107) 清水一九四四、一五〇頁

(108) 『開元占經』六十八引

(109) 『續漢書』禮儀志、中に

仲秋之月、縣道皆案戶比民、年始七十者、授之以玉杖、餔之糜粥……是月也、祀老人星于國都南郊老人廟

と。なほ『史記』封禪書「壽星祠」の『索隱』に

壽星、蓋南極老人星也、見則天下理安、故祀之以祈福壽

とあり、この解釋が當つてゐれば老人星の祭祀が行はれた證據は前漢に遡ることになるが、これには異說がある。『正義』に

角亢在辰爲壽星

と、卽ち二十八宿の角宿亢宿は辰（東南の方角）に當り、これらは黃道十二宮中の壽星の次に當る、といふ說明である。いづれが可か決め難い。

(110) 『晉書』禮儀志、上に

及成帝咸和八年正月、追述前旨、於覆舟山南、立之天郊、則五帝之佐、日月五星、二十八宿、文昌、北斗、三臺、司命、軒轅、后土、太一、天一、太微、勾陳、北極、雨師、雷電、司空、風伯、老人、凡十二神也

と。また同書、禮儀志、上には

常以仲春之月……又是也、祠老人星于國都南、遂郊老人星祠

とある。また『宋書』、禮儀志、三には宋武帝永初三年九月、司空羨之、尙書令亮らが前引の晉の前例にならはんことを奏して許可された記事がある。『隋書』、禮儀志、一に

梁、南郊爲圓壇……歲正月上辛行事、用一特牛、祀天皇上帝之神於其上……五方上帝、五官之神、太一、天一、日月五星、二十八宿、太微、軒轅、文昌、北斗、三臺、老人、風伯、司空、雷電、雨師皆從祀

とあり、また同書、禮儀志、二には

陳制皆依梁舊……命太中署、常以二月八日、於署庭中、以太牢祠老人星、兼祠天皇大帝、太一、日月五星、鉤陳、北極、北斗、三臺、二十八宿、大人星、子孫星、都四十六坐

とある。

(111) 楊一九四一、二五四頁

(112) 第二十一、論五帝

(113) 顧、楊一九四一、一三四—八

(114) 『漢書』揚雄傳、上

(115) 出石一九四三、五七九—八〇頁

(116) 劉一九二三、六、一六

(117) 常儀は黃帝の臣であり、常娥は帝嚳の四妃で時代が違ふ、儀と娥が同音である所から混同したのだといふ議論があるが（史繩祖『學齋佔畢』常儀常娥之辨、周祈『名義考』常儀占月）これは從い難い。當然儀と娥は同音だから常儀と常娥は同一の神であり、これらの傳說は常儀が月を司る神である所から生れたものだ、といふべきである。なほ前引『晉書』律曆志の文を『學齋佔畢』に漢志に誤るが、この誤りは『辭海』常儀の條にも踏襲されてゐる。

(118) 傳說的な工藝技術家（森一九五二）。

(119) 森鹿三は說文の段注を讀んで蠃がはまぐりかかたつむりか何を指すか思ひ迷つてゐるが、これは讀み誤りによるものである。森は（森一九五二、二一五頁）『だが段玉裁はそこに「古語では變に隨つて成る者を蒲盧といい、夏小正に雉が淮に入つて蜃となるといふその蜃は蒲盧だ」というその師戴震の說をのせているから、我々もこの戴氏の說によることにして蠡は蜃卽ちはまぐりといふことにしよう』と記す。古人はさういふ變身をするジャンルを蒲盧と呼んだ、といふのが戴震の意である。蛤は蒲盧の類であつても、蒲盧は蛤ば

かりを指すのではない。蛤と蠃とは二物である。『史記』貨殖列傳に「楚越之地……果隋蠃蛤、不待賈而足」と兩者並んであげられてゐるごとくである。

(120) 杉本憲司氏の指摘による。

(121) 三角緣神獸鏡については小林一九七一の詳細な研究がある。

(122) 馬一九六二、五四頁

## 挿圖出所目錄

圖1 京都國立博物館提供寫眞
圖2 京都大學人文科學研究所藏寫眞
圖3 端方一九〇九、一、三
圖4 a 劉一九三二、第二図
b 同右、第三圖
圖5 同右、第一一圖
圖6 傅一九五〇、二五三
圖7 既陶一九五九、三二頁
圖8 勞一九六四、附圖5
圖9 京都大學人文科學研究所藏拓本
圖10 筆者製圖
圖11 林一九六四、上、圖二八
圖12 Stein 1928, Pl. 108, 109
圖13 徐一九三〇、二、三六b
圖14 圖1に同じ
圖15 上、鈴木一九六九、圖版四二
上二、梅原一九二四、圖版一〇
上三、鈴木一九六九、圖版八
下 浙江省文物管理委員會一九五七、圖四、1
圖16 上、劉一九三五、一五、九〇b
中、中國科學院考古研究所洛陽發掘隊一九六三、圖一一、1
下、鈴木一九六九、圖版三六
圖17 上、鈴木一九六九、圖版八
中、梅原一九二五、圖版一二
下、鈴木一九六九、圖版一〇
圖18 シアトル美術館提供寫眞
圖19 京都大學人文科學研究所藏寫眞（後藤一九三二、圖版四九、8）
圖20 京都大學人文科學研究所藏寫眞
圖21 圖18に同じ
圖22—24 筆者製圖
圖25 雲南省文物工作隊一九六三、圖版一、1
圖26 曾等一九五六、拓片四一幅
圖72 聞一九五五、圖四三
圖28 樋口隆康氏原板寫眞（後藤一九三二、圖版五一、5）
圖29 南京博物院等一九六三、圖一二四
圖30 京都大學人文科學研究所藏寫眞
圖31 京都大學人文科學研究所藏寫眞
圖32 Siren 1929, pl. 69, B.
圖33 圖31に同じ
圖34 京都大學文學部博物館寫眞（同博物館考古學資料目錄、3、金屬製品、圖三〇七）
圖35 京都大學人文科學研究所藏寫眞（梅原一九三一、圖版四七）
圖36 京都大學人文科學研究所藏寫眞
圖37 同右
圖38 同右（『世界考古學大系』7、圖版一五一）
圖39 京都大學人文科學研究所藏寫眞
圖40 聞一九五五、圖九五
圖41 張一九五七、圖一
圖42 京都大學人文科學研究所寫眞（梅原一九四二、圖版五五、(一)）
圖43 上海博物館一九六四、圖版九六、附冊一〇三頁

圖44　京都大學人文科學研究所藏拓本（Chavannes 1909, pl. 89, no. 167）

## 引用文獻目錄


中國、日本

出石　誠彥　一九四三、『支那神話傳說の研究』、東京

上田　穣　一九三〇、『石氏星經の研究』（東洋文庫論叢、第一二）、東京

梅原　末治　一九二四、『挑華盦古鏡圖錄』、京都

〃　〃　一九二五、『挑陰廬和漢古鑑圖錄』、奈良

〃　〃　一九三一、『歐米に於ける支那古鏡』、東京

〃　〃　一九四二、『漢三國六朝紀年銘鏡圖說』、京都

雲南省文物工作隊　一九六三、雲南省昭通后海子東晉壁畫墓清理簡報、『文物』、一九六三、一二、一—五

大淵　忍爾　一九六四、『道教史の研究』、岡山

王　振鐸　一九四八、司南指南針與羅經盤(上)、『中國考古學報』、三、一一九—二五九

王　世仁　一九六三、漢長安城南郊禮制建築（大土門村遺址）原狀的推測、『考古』、一九六三、九、五〇一—五一五

既　陶　一九五九、山東省普查文物展覽簡介、『文物』、一九五九、一一、二九—三三

『京都大學文學部博物館考古學資料目錄』、3、一九六三、京都

顧頡剛、楊向奎　一九四一、三皇考、『古史辨』、七、中、二〇—二八二

小林　行雄　一九七一、三角緣神獸鏡の研究—形式分類篇—、『京都大學文學部研究紀要』、第一三、九六—一七〇

駒井　和愛　一九五三、『中國古鏡の研究』、東京

後藤　守一　一九二六、『漢式鏡』（日本考古學大系、第一卷）、東京

〃　〃　一九三二、『古鏡聚英』、上篇、東京

清水　嘉一　一九四四、史記天官書恒星考、『東方學報』、京都一四、三、一三七—五六

上海博物館　一九六四、『上海博物館藏青銅器』、上海

重慶市博物館　一九五七、『重慶市博物館藏四川漢畫像專選集』、北京

徐　乃昌　一九三〇、『小檀欒室鏡影』

新疆省維吾爾自治區博物館　一九六〇、新疆省吐魯番阿斯塔那北區墓葬發掘簡報、『文物』、一九六〇、六、一三—二一

鈴木　博司　一九六九、『守屋孝藏蒐集方格規矩四神鏡圖錄』、京都

『世界考古學大系』7、東京

齊　思和　一九三四、黃帝之制器故事、『古史辨』、七、中、三八一—四一五

浙江省文物管理委員會　一九五七、紹興漓渚的漢墓、『考古學報』一九五七、一、一三三—一四〇

曾昭燏、蔣寶庚、黎忠義　一九五六、『沂南古畫像石墓發掘報告』、北京

端　方　一九〇九、『匋齋藏石記』

中國科學院考古研究所　一九五九、『洛陽燒溝漢墓』、北京

〃　〃　一九六三、洛陽西郊漢墓發掘報告、『考古學報』、一九六三、二一—五六

中國科學院考古研究所洛陽發掘隊　一九六三、洛陽西郊漢墓發掘報告、『考古學報』、一九六三、二、一—五六

張　鑫如　一九五七、湖南長沙硯瓦池古墓的清理、『考古通訊』、一九五七、五、七一—五

中山平次郎　一九一八、古式支那鏡鑑沿革、(一)『考古學雜誌』、九、三、一四五—一五九、同(二)、同九、四、一八九—二一二、同(七)、同九、八、四六五—四八一

長廣　敏雄　一九三三、漢代を中心とせる動物表現に就いて、『東方學報』、京都四、一〇六—一四七

南京博物院等　一九六三、『江蘇省出土文物選集』、北京

西田　守夫　一九六八、神獸鏡の圖像—白牙學樂の銘文を中心として—、『ミュージアム』、二〇七、一二—二四

馬　承源　一九六二、越王劍、永康元年群神禽獸鏡、『文物』、一九六二、

一二、五一一五
林　巳奈夫　一九五九、周禮考工記の車制、『東方學報』、三〇、一二七五一三二〇
〃　〃　一九六四、後漢時代の馬車、上、下、『考古學雜誌』、四九、三、一一一八、四、一一一七
〃　〃　一九六六、鳳凰の圖像の系譜、『考古學雜誌』、五二、一、一一一二九
原田淑人、田澤金吾　一九三〇、『樂浪』、東京
傅　惜　華　一九五〇、『漢代畫像全集』、初編、北京
聞　　宥　一九五五、『四川漢代畫像選集』、上海
松本榮一　一九三七、『敦煌畫の研究』、東京
水野清一　一九四七、博多博東博鎭博局、『東洋史研究』、新一、五・六、三九一四五
森　堕三　一九五二、公驀子に關する二三の說話、『東方學報』、京都二一、二〇七一二二六
安田二郎、近藤光男　一九七一、『戴震集（中國文明選8）』、東京、名古屋、北九州
楊　　寬　一九四一、中國上古史導論、『古史辨』、七、上、六五一四〇四
吉田光邦　一九七二、高松塚の星象・四神圖について、『佛教藝術』、八七、五六一六四
羅　振　玉　一九一九、漢兩京以來鏡銘集錄、『遼居雜著』
劉　體　智　一九三五、『小校經閣金文拓本』
劉　　復　一九三二、西漢時代的日晷、『國學季刊』、三、四、五七三一六一〇
劉　文　典　一九二三、『淮南鴻烈集解』、上海
梁　上　椿　一九四〇一四二、『巖窟藏鏡』、北京
勞　榦　一九六四、六博及博局演變、『中央研究院歷史語言研究所集刊』、三五、一五一三〇

## 歐　文

Bulling, A., 1955: The Decoration of some Mirrors of the Chou and Han Periods, *Artibus Asiae*, no. 1, pp. 20–45.

Camman, Schuyer, 1948: The "TLV" Pattern on Cosmic Mirrors of the Han Dynasty, *Journal of the American Oriental Society*, 68, 4, pp. 159–167. "

" 1950: Suggested Origin of the Tibetan Mandala Painting, *The Art Quarterly*, Spring, 1950.

Chavannes, E., 1909: *Mission Archéologique dans la Chine septentrionale*, Paris

Schlegel, Gustave, 1875: *Uranographie chinoise*, La Haye, Leyde

Ho Peng Yoke, 1966: *The Astronomical Chapters of the Chin Shu with Amendments, Full Translation and Annotations*, Paris, The Hague

Karlgren, B., 1934: Early Chinese Mirror Inscription, *Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities*, no 6, pp. 9–79.

Kaplan, Sidney M., 1937: On the Origin of the TLV Mirror, *Revue des Arts Asiatique*, t. 11, pp. 21–24.

Norton, Arthur P., 1964: *A Star Atlas and Reference Handbook* (*Epoch* 1950), Edinburgh and London

Siren, O., 1929: *Histoire des Arts anciens de la Chine*, II, Paris et Bruxelles

Stein, O., 1921: *Serindia*, Oxford

" 1928: *Innermost Asia*, Oxford

土橋八千太　Chevalier, Stanislas, S. J., 1911: *Catalogue d'Etoiles fixes observées à Peking sous l'Empleur K'ien-loung*, Shanghai